

---

# 白紙に綴る夢

緋紹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白紙に綴る夢

### 【Nコード】

N5698S

### 【作者名】

緋紹

### 【あらすじ】

春。

宝岳学園高等部に4人の男子が集まり、出会った。

「俺らで部活やるーぜ！！なんでも屋みたいなやつ！！」

日々を過ごしていく中で、彼らは何を見つかるのだろうか。  
リレー小説ですー！！

一生ものの出会い(前書き)

リレー小説第2弾です!!

## 一生ものの出会い

昔、ばあちゃんが言っていた。

『人には一生ものの出会いがある。大抵人はそれに気付かないまま過ごしてしまうんだよ。お前はそれに気付いて生きていけたらいいねえ』

俺は知っていた。ばあちゃんは嘘をつかないことを。

だから今でも信じて、その 一生ものの出会い とやらを探している。

春。

俺は自転車に乗って坂道を降りた。

今日は宝岳学園<sup>ほうがく</sup>高等部の入学式で、俺は由輝と待ち合わせていた。

「おっせー」

「悪い、寝坊した」

「やっぱりな」

由輝 北村<sup>きたむら</sup> 由輝<sup>ゆき</sup>は俺の中学からの友達で、いわゆる 親友

というやつだ。

「真実はやると思ったんだ」

「うっせー」

再びペダルを漕ぐと少し花の薫りの混じった風が吹いた。

自転車を自転車置き場に置いて昇降口に向かうとクラス表があった。その前に立つと隣に2人男子が立っていた。

「えーっと……」

東山 真実は……。

クラス表を目でなぞって自分の名前を探す。

ん？

「みなみざわ…あさ…や…？」

朝弥。へえ〜こんな名前のやついるんだ。文字が青いから男かな。

「あさみだよっ！！」

突然胸にカメラをかけた方の隣の男子に怒鳴られた。

「え？」

「あ・さ・み！！ああ書いてあさみって読むんだ！！」

「あ、そう…ごめん…」

「朝弥、うるさいよ」

「はあ？」

「初日から大声出すことないんじゃない」

「でもよー茜ー」

「はい黙る。行くよ」

眼鏡をかけた方の男子に南沢はひっぱられた。

「ちよっ、ちよっと待って！！他に知り合いないか探させて！！」

「しよーがないなー」

南沢が体勢を直して向き直る。

「あーこいつもいんのかー。……あ？ま…み…？」

「あ、本当だ。しんじつつ書いて、まみかな」

「いや、それまこと」

「へ？」

「俺の名前だし」

「え！？うつそマジ！？あ、マジだ青で書いてある」

南沢が目丸くして言った。

傍を離れて由輝のところに戻る。

「由輝、同じクラスだった」

「あ、ホント。よかった」

中に入って靴を脱ぐと教室に向かう。

「えーっつとB組は…」

「あつた」

由輝が中に入っていくともうすでにたくさんの人で埋もれていた。黒板に座る場所が書かれており、指定されたところに座る。すぐに由輝がやってきた。

「楽しみそう？」

「まーまーかな」

「真実、何部入るわけ？」

「バスケ！今はとりあえずバスケしたい！！」

「まあまあ落ち着けよ。すぐできるって」

「由輝は？」

「軽音も捨てがたいけど……弓道かな」

「へー」

「あっさっきの！！」

声がしてそつちを見ると南沢と……茜と呼ばれていたやつが入り口に立っていた。

「おす」

「えーっと、何だっけ？ま……まことだ真実！！」

「呼び捨てかい」

「いーじゃん。あれ、そつちは？」

「あ、俺、北村 由輝」

「へー！！オレ南沢 朝弥！！よろしく」

「うん」

「じゃあ僕も自己紹介しておこうかな。僕は西川 茜。よろしく」

「おー」

南沢が隣に座った。

「え、そこ？」

「こーこー」

「嘘つくな朝弥。もう2つ後ろ！！」

「いーじゃん」

「嘘つきは泥棒の始まり」

「オレ泥棒じゃねーし」

南沢が口を尖らせる。

思わず嘔き出す。

ヤバい。面白いぞこいつら!!

「……………」

俺の顔を見た南沢がカメラのシャッターをきった。

「……………何してんだよ南沢……………」

「いや、イイ顔してたからつい」

「はー？何、写真好きなの南沢は」

「そうなんですよねー。あ、朝弥な朝弥。名前でプリーズ!!」

「じゃあ必然的に僕は茜？」

「そうだな」

「こっちは由輝？」

「ご名答!!」

朝弥がケラケラと笑う。

「新入生の皆さーん体育館に移動しまーす」

これが俺達4人の 出会い だった。

一生ものの出会い（後書き）

お次は夕さん！！



運命の仲間（前書き）

夕です！

## 運命の仲間

運命の出会い？ってほんとにあるんだな。

入学から一週間、僕達はやっぱりつるんでいる。

チャイムが鳴った。

「よっし、部活だ！ぶつかっー！！」

朝弥が慌ただしく僕のところまでやってきた。

「茜、行こーぜー！！」

「いいけど、僕と朝弥は別の部」

僕は迷うことなく文芸部に入った。

スポーツが向いてないってのもあるけど、文芸部ってサボれそうなイメージだったから。

「ほら立て」

「少しくらい待てよ」

教科書やらなんやらをカバンに詰め込む。

「うし、行くか！！」

「はいはい」

教室を出るときに、真実と由輝にひらひら手を振る。

「また明日」

2人も部活の準備をしてるようだった。

「またなっ」

真実は笑って言うてきて、由輝はひょいと手を挙げた。

部室の前で朝弥と別れた。

「失礼しまーす」

部室といっても、文芸部は人数が少ないから、図書室を使っている。カバンを机に投げる。

今日は僕一人かな。

図書室には利用者はいるけど、文芸部員の姿はなかった。  
またみんなサボリかよ。

じゃあ僕もどっか行こうかな。

することもないし、朝弥のどこにでも…。

いきなりドアがスパーンと開いた。

「茜ー、写真撮らせるー!!」

「朝弥かよ」

「なんだよー」

「なんでも?」

「うそつけ!!」

「今から朝弥のどこ行こうと思ってただけ」  
カバンを掴む。

「なんで?茜、部活は?」

「サボろうかと」

朝弥を置いて図書室を出る。

朝弥が来る前にドアを閉めてやったら、勢いよくドアにぶつかって  
きた。

「ああーかあーねえー!!!!」

「何?」

さっさと昇降口に向かう。

ドタドタと朝弥が追いかけてきた。

「な、弓道部行かね?由輝のどこ」

「なんで」

もう機嫌は元通りなわけ?

「オレの部活動!!由輝の写真撮るんだ」

「ふーん……」

でも、ちよつと行きたいかもな。

入学してから他のみんなの部活って行ったことないし。  
くるっと向きを変えて歩き出す。

「あ、行つてくれんの？やりい！！」

「僕が見てみたいだけ  
スピードをあげる。」

「おい、待て！！」

全力疾走で弓道場へ向かう。

「待たない」

ほんと朝弥は面白いな。

運命の仲間（後書き）

次は秋雨さん！

部活動(前書き)

秋雨です！

## 部活動

「そついや、単独行動つていいのか？」

「単独行動も何もオレ1人だけだし」

団体行動の方が無理だ。

「それ先生に承認されてんの？」

承認？

「何だ、それ。そんなんいんの？」

そついうと、茜が大きな溜め息を吐いた。

「あのなあ……………はあ、もういいや。先行つとく」

茜の歩くスピードが上がる。

「なんだよー。教えるよー」

オレの歩くスピードも上がる。

「何でもない」

そう言われると知りたくなるんだよな！

「それより、弓道場についたぞ」

「マジで？」

いつ着いたんだ？

中からパーンという音が聞こえる。

扉を少し開けて中の様子を見る。

ちよつと由輝が弓を引いているところだった。

シャッターチャンス！！

カメラを構えてシャッターを押す。

パシャツと、弓道場に縁のない音が響く。

それと同時にパーンと音がする。

「ふう。……………で、その2人は何してんの？」

由輝が腰に手を当てて、呆れ顔でこつちを見てくる。

「部活見学」

「部活動」

「はあ？」

由輝がこっちに来る。

扉が音をたてて閉まった。

ん？閉め出し？

扉を開けて中に侵入する。

「入ってきたし……………」

由輝が何か言ってるけど気にしない。

「へー、弓道場の中ってこんななんだな」

「なかなか広いな」

シャッターを押して写真を撮る。

あ、そーだ。

「体育館行こう！！」

「……………は？」

「また突然な」

バスケット部の練習風景を撮ってやる。

「ほら、由輝も！！」

由輝が持っていた弓を奪って茜に渡す。

茜はそれを壁に立てかける。

「よし、行くぞ！！」

「ちよ、待て！！」

袴姿の由輝を引っ張り弓道場から出る。

「北村ーっ！！サボるなーっ！！」

誰かが叫んでるけど無視。

目指すは体育館！！



部活動（後書き）

次はプー太さん！

見学（前書き）

プー太です！

## 見学

「腕痛いんだけど」

「黙って付いてくる!!」

茜は何も言わねえし、朝弥は目をぎらつかせてるし…

俺袴のままだし……。

ま、いつか別に。

「とーちゃーく!! さてさて真実はどこかなあー」

「朝弥、レンズ覗いたままだと前みたいにボールが…」

と、そこでグシャリ。

……グシャリ?

「か、かかか…カメラあああ!!」

うわあ…悲惨。

ご臨終じゃん。俺の楽器がああなったら泣くぞ即効で。

朝弥の肩に手を置いて一言。

「まあまあ落ち着けよ」

「これが落ち着いていられるかー!!」

うん、決まった。

やっぱ1日に1回は言わないとな、このセリフ。

「あ、真実いたよ。…ってカメラまた壊したんだ、馬鹿だよね朝弥

って」

茜の一言で朝弥が吠えた。

が、俺は真実を眺める。2人をそっちのけで。

「かつけー…」

練習に集中してる真実は俺達にまだ気づいてない。

ケータイ持ってくればよかった。

盗撮してファンの子に売れば ……むふふ。

おっとつと。危ねえ。つい裏の俺がでちゃったよ。

「すいませーんボール取ってくれませんかー!!…って由輝!!…と

朝弥と茜！！お前ら部活は？」

「俺は2人に今連れてこられたとこ」

「ふーん。で、こっちは？」

「見ての通り」

転がってきたボールを拾って渡す。

うん、一日一善だな。

「えーっと、大方カメラが壊れてそれを茜が馬鹿にしてる、って感じか？」

「大正解。どうにか止められねえ？」

「ほっとけばいいだろ別に。それよりなんでその格好？」

「それも推理してみてください」

うーんと唸りながらボールを回す真実の手には俺が前にあげたリストバンドがある。

使ってくれてんのかあ。

なんかむず痒いぞ。

「連れてこられたから？」

「うん正解。俺拉致られたわけ2人に」

「ヘードンマイ」

そんなこんなで真実が2人を宥めてくれて一件落着。

平和が一番だな。

「ねーねー真実！！ダンクやってみてよ！！」

「僕も見たい」

「は？！お前らなあ…まあいいよ！！やってやるよ！！」

「そうこなきや！！」

今知ったんだが朝弥は常にカメラは2つ持ってるみたいだ。

しかも代用が最新のデジカメ。いいなあー

「見てるよ！！」

「うん！！」

真剣な顔でドリブルを始めた真実。久々に見るなあ、ダンク。ぼんっ

「ん？」

「ハロー北村」

「げっ部長」

「部活、ちゃんとしような。マネージャーがお前用のメニュー組んでくれてるぞ」

「ずりずり引きずられていく俺。」

「真実のダンク見たかったのに……」

「部長なんか嫌いだあ」

見学（後書き）

次は緋紹さん！

## お誘い（前書き）

一周しました、緋紹です！

お誘い

欠伸をして窓の外を見る。

グラウンドではC組がサッカーボールを蹴り合っていた。

「……で  $f(x) = 2/x + 1 + 3$  を して……」  
わかるかっつうの。

適当にノートをとって、その端に落書きをする。

ボールが弾んでいる絵で、我ながらうまいと思う。

クスツと笑い声がした。

そっちを向くと中元 なかもと 舞 まい が落書きを見て笑っていた。

え？なんで笑う？

中元に見えるようにノートに書く。

カワイイ

同じように返してきた。

カワイイ！？かっこいいじゃなく？

うん

じゃあこれは？

ちよつと猫とは言い難い猫を書いてそれにシュートさせた絵を書いた。



これは変……！ていうか何これ？ボールはわかるけど……

ネコです……！ネコなの……！

あっほんとだ……！わかんないよ……

女子はいつも丸い文字を書く。男子とは違うころころした字でなんだか笑っているように見える。

文字、かわいいな

少し経つても返事が返ってこないから中元を見るとどう返事をしたかわからないって顔をしていた。仕方ない。

『文字』の下に強調するようにアンダーラインを引くと肩を叩かれた。

結構痛い。

顔を歪めてみせると慌てて

ごめん

と書いた。

ニヤリと笑い返すと中元も笑った。

「じゃあ授業を終わります、起立」

教科書を片付けると肩を叩かれた。

「んー？」

振り返るとニヤニヤしながら由輝と朝弥が立っていた。

「何？何だよ……！」

「仲睦まじいことで」

「は？」

「な・か・も・とだよ中元！！なんかやりとりしてたる？」

「あんなの普通じゃん」

「わかんないよな……お前には……」

「何が！！」

「中学の頃さ、球技大会とかで超応援されなかった？」

「いつの間に傍に来ていたのか茜が言った。」

「おわっびっくりしたー。え？応援？うん、されたよ？由輝だってされてたし」

「なんだよお前らー！！いいなー！！」

「お前だつてされたる？」

「させたけども！！何か！？」

「なんか…悲しいよね…」

「茜ー！！そこは言っちゃいけない！！」

「いやむしろ今のは言うべきだったのでは？」

由輝が汗を浮かべて言った。

「うっさい由輝！！」

「あ、ところでさ今度春祭りがうちの近所であるんだけど行かねえ？」

茜がチラシを投げて寄越した。

「祭りかー。俺行ける」

「俺も」

「じゃあ朝弥はオートで参加となります」

「いやいいけど」

「じゃあ今週の土曜日な？どうせなら昼から集まるっか」

「りょーかーい」

「飯食つて一時集合！！」

そこまで話してチャイムが鳴った。

お誘い（後書き）

次は夕さん！

祭りの春(前書き)

夕です！

## 祭りの春

そして、土曜日だ。

今、僕は朝弥んちの前で待ちぼうけ。

僕は12時過ぎには出てこいって言ったはず、なのに朝弥は出てこない。

ドアベルを連打する。

遅い、ほんと遅い!!

時間を見る、もう12時半を回ったぞ!!

一時間には真実と由輝との待ち合わせ場所についてときどきあったのに、ようやく玄関の扉が開いた。

「よっ、茜!!」

「その前になんか言うことあるよな」

朝弥のほつぺたをむにーっと引っ張りながら歩き出す。

「いひゃい!!」

涙目で訴えてるけど、30分待ったんだしいいよね。

「なんで遅れたの？」

「カメラ探してたんだ!!」

「なに、祭りにも持つてくわけ？」

「もちろん」

ほつぺたを離してあげたら急に元気になった。やっぱり朝弥はこごでないと。

僕もからかいがないよ。

真実達との待ち合わせ場所は祭り会場近くの交差点。

一番、祭り会場に近いところ。

「朝弥ー!!茜ー!!」

向こうで手を振ってるのは由輝…?

僕、目悪いんだよね。

「おー、真実が手振ってるぞ」

「……………ふーん」

そのぶん朝弥は獣並みに目がいい。  
ほんと分けてほしい。

2人と合流する。

「おっせー」

同時に半眼で睨まれた。

「わりい、カメラなくしてさー!!」

「ま、そんな気はしたけど」

「由輝ひどい!!」

「いや、なんで」

「そうそう、朝弥のやりそうなことくらい俺にもわかるし」

「真実まで!?!」

ちよつとみんな、なんで集まったか忘れてないか？

よくこんなところで騒げるよなー。

「茜、なにぼーっとしてんの?」

「別に…」

「じゃ、行くか」

朝弥が先導して、一同は歩き出した。

会場は川原でたくさんのお店でうまっていた。まだ昼なのに、人もう  
ようよ。

「うわぁ…アリの大群…」

「気持ち悪い表現すんな、茜!!」

隣で真実が軽く小突いてきた。

でも本当にそう見える。

「あれ、由輝は?」

「…朝弥もいないじゃん」

もしかして、もうはぐれた?こんなところで…まだ会場に入って10  
歩とかだけだ。

「どうする?」

「探すか」

あの2人を一緒にしたら由輝が可哀想だよ。  
真実とまではぐれないようにしながら進む  
と、その時、女の人の悲鳴が聞こえた。

真実が走り出す。

「真実！！」

あっという間に悲鳴の方へ行ってしまった。

結局、残ったのは僕一人。

「どうしろと？」

祭りの春（後書き）

次は秋雨さん！



3 (前書き)

秋雨です！

「茜、あっち行ってみよーぜ!!」

茜の腕を引っ張って 金魚すくい とかかれた屋台の方に行く。

「ちよつ、朝弥!!」

ん？茜の声じゃない。この声は……。

「はしゃぎすぎ。少しは落ち着けよ」

茜だと思い込んで引っ張っていたのは由輝だった。

「……………茜じゃねえ」

「そりゃそうだ」

おかしいな、茜を連れてきた気がしたけど……………。

うーん、途中で入れ替わったのか？

「あーあ、真実達とはぐれた」

由輝が周りを見て溜め息をつく。

「真実達、迷子か？」

「いや、俺らが迷子」

ふーん。真実らはぐれたのか。

「由輝、金魚すくいしようぜ!!」

「金魚すくいーい？お前高校生っていう自覚あるの？」

「じゃあ射的で勝負」

「受けて立つ」

そうと決まれば射的屋に

「おっちゃん、2回分!!」

「はいよー!!」

店のおっちゃんが射的の銃を1本ずつオレと由輝に投げる。

「商品を多く取ったほうが勝ちな」

「おっ」

とりやすそうな商品を見つけてそれに狙いを定めた時、女の人の悲鳴が聞こえた。

「なんだあ？」

そっちのほうを見てみると、男と真実がおいかけてっこをしていた。男は女物のバッグを持ち、真実は野球に使う硬球を持っている。

「朝弥、やっぱあの男に弾を多くあてたほうが勝ちな」

「おう」

あー、楽しそうだなー。

「おっちゃん、コレ借りるなっ!!」

「気いつけるよー」

男を追いかける。が、人が多くて思うように進まない。

「由輝、もうちょっと人気のないところ行かね？」

あの男も見つけやすいし。

「そうだな」

由輝も了解してくれたし、移動すっか。

斜面を駆け上がる。

「朝弥、あいつどこにいるかわかるか？」

「んー、ちよっと待って」

えーっと……。お、いたいた。

「屋台の後ろで真実とおいかけてっこしてる」

「了解」

由輝が銃を構えてぶっぱなつ。

弾は男を掠めた。

「おしい!!」

由輝がもう一度ぶっぱなつ。

今度は男が持っていたバッグのひもにあたった。バッグが落ちる。

「おっナイスコントロール!!」

「どうも」

「うおらあああ!!」

真実が、持っていた硬球を投げる。

それは見事に男の頭に直撃。

「おー」「おー」  
写真撮ったときやよかったな。

3 (後書き)

次はプー太さん！

結成（前書き）

プー太です！

## 結成

「本当にありがとうございます。どうやってお礼をしたら…」  
「いえいえ!!」

ひつたくり事件は真実のおかげで無事解決。女の人は泣いて喜んで  
いた。

その姿を見てハツとひらめいた。

「…俺、誰彼問わず人助けするの結構大事だと思う」  
真実も同じことを考えてたみたいだ。

「俺らで部活やろうぜ!!なんでも屋みたいなやつ!!」

朝弥と茜は「は?」みたいな顔してる。

「それいいな!!」

「だろ!?名前なににする?」

「うーん…なんでも屋…万屋?お、万屋なんてどうだ!!」

「それいいな!!目安箱みたいな作って、困ってる人の依頼受け  
てさあ…」

「ちよつと待ったあ!!俺ら部活してんじゃん!!」

「…とーぜんかけもちだろ」

「でさ、こんなのどうだ?」  
「ニヨニヨ」

真実に耳打ちしていると茜に肩を掴まれた。

「5人いないと“部”にはならないって知ってるの?」

「…!!」

なんてことだ部活ができないっていうのか?

1人足りないだけでできないなんてぜつっつたいに嫌だ!!

「校長に…直談判に行ってくる」

「俺も行く!!」

「待て待て待て待て。部はできないけど同好会ならできるって言い  
たかったの僕は」

「…それを早く言えよ茜!!」

「そ、そんなにキツク言わなくてもいいじゃん…。2人して肩を掴んで怒鳴らなくなつて…」  
急にシヨボンとした茜。

気のせいか目に涙らしきものがあるように見えるんだが…本物か!!  
「ごめんな!!俺言いつぎた!!ほんつとつゴメン」

「俺もわりい」

「僕、僕…」

2人して茜を慰める。

けど、なかなか許してくれない。

「1つ、お願い事きいてくれるなら許してあげてもいいよ?」

「…どんとこい!!」

一気に茜の涙はひっこんで、口元がニヤツてなった。

「僕、今日はいっぱい食べたいものがあるんだ。買ってくれるよね?」

く、黒!!

朝弥は笑いこけながら俺たちを連写してるし、知ってたな!!

「買ってくれなきゃ僕許してあげないから」

腹黒い上に根に持つのか!?

「仕方ねえな、買ってやるよ。どれが欲しいわけ?」

…腹をくくるか。

「あれと、あれ。あと、あれも。あ…でもあと3つ…」

「そんなに食うのかよ!!」

「嘘だよ。そんなに食べられるわけないじゃんププッ」

「あーかーねー!!」

それから俺と茜の鬼ごっこがスタート。

最終的に俺が茜をとっつかまえて口にリンゴ飴をつっこんで終了。  
苦しみながら嬉しそうに食べていた。

「さて、これからどうするかねえ…」

「んじじ、ふぬぬ…」

「…まあまあ落ち着けよ」



「お前が言うのかよ!!」

「うおお、真実と朝弥がハモった。おみごと。」

「本当にすんの万事屋、みたいなやつ」

「みたい、じゃなくて万事屋な。やるよ」

「でもよ!!」

「朝弥あきらめた方がいいぞ。由輝は言い出したら絶対止めねえから。それに止めるようなことでもねえだろ」

「ほうらよ あひゃみ いーれひよ べつに」

早!! リンゴ飴もなくなってんじゃん。おそるべし。

「なーなー部長って誰がする?」

「それは言い出しっぺのお前だろ」

「えー!!」

「僕は賛成だよ。僕には少し向いてない役職だし、朝弥にはちょっと…ねえ?」

俺、茜、真実の視線が朝弥に集まる。

みんな黙ったまま順番にうなづいた。

「俺がやる」

「なんでだよ!!」

だってなんかおっそろしい事になりそうな気がするじゃん。

今日も相変わらず吠える朝弥の口にはいちご飴を2つぶちこんでやった。

うん、すごい顔。

「提案なんだけどさ、結成記念に写真撮ろつぜ!!」

「ナイスアイデア真実!! そーしよーぜ」

「誰が撮るの?」

「朝弥：はダメだな。一緒に入んねえと意味ねえし」

「オレ撮りたい!!」

「ダメだって言ったろ バーカ」

今度はぶどう飴とパイナップル飴を入れてやった。

その際にカメラをパチって、通りかかった2人組の女にわたす。

「撮ってくれる？」

「「も、もちろん!!」」

苦しそうに飴を噛み砕く朝弥をひっぱって4人集まってポーズをとる。

「はい、ちーず」 カシヤ

「ありがとな!!んじゃ」

デジカメを返してもらって、写ってる写真を見る。

「あ”あ　　!!」

「おまつ!!ブブツ!!」

俺と茜と真実は仲良く笑顔でピースなのに朝弥は…

「半眼の上に変額かよッ!!」

そんなこんなで勝手に立ち上げ万事屋同好会。  
なんだか楽しくなりそうな予感がする。

結成（後書き）

次は緋紹さん！

## 顧問と部室（前書き）

緋紹です？

## 顧問と部室

「失礼しまーす」

職員室に入って鎌田先生の所へ行く。

ネームプレートに“鎌田 久美”ひさよしって書いてある。

俺は初めてこの名を見たとき間違っって読んでしまった。男の先生なの  
にありえないだろうとは思ったのだが、間違えた。

『く…くみ…?』

『バカ? ひ・さ・よ・しだろ?』

由輝に小突かれたのを覚えている。

「カマさーん、お願いがあるんですけどー」

「なあに?」

先生はオカマで、それに名前もかけてカマさんと呼ばれている。

「部、立ち上げるって言っって紙貰ったじゃないですか。で、よく見ると顧問がいないとダメなんすよ。だから先生にやってもらえないかなって」

「へえ…そうねえ…」

カマさんが考える素振りを見せる。頼むよ先生?

「いや、顧問つっても一応なんで、その肩書だけ背負っててもらえれば…」

「何部?」

「え?」

「だから、何部の顧問なのよ」

「え…っと、万屋部…いや4人だから同好会です」

「ふうん…どうしましょうかねえ」

「活動内容は、困ってる人を助ける部です? あ、いや同好会です?」

「いいわよ」

「ま…マジですか!? ありがとうございます?」

顧問欄に名前を書いて判を押しもらった。

「やったカマさん最高？」

「えーっと部室は顧問がいればもらえるのね？じゃあこれは私が出るときです、後で部室のことは言うから」

「はい？失礼しました？」

職員室を出て廊下にしゃがんでいる3人にピースをしてみせる。

「マ…マジ！？」

「やった？」

「カマさん？」

全員が万歳をする。大きな声に周りの目が集まった。

「部室とかは後で連絡してくれるってさ」

「おお、部室ももらえんのか？」

「そういえばそうだったね」

「あー早く活動してえなー？あ、そうだ悪かったな真実。もう少し早く日直終わらせられればよかったんだけど」

「ほんとだよ。そんで朝弥も茜も中入ってこねえしさ。俺1人だけ判決待ってる罪人の気分だったよ」

「わかりやすいようなわかりにくいような微妙な例えだね」

「ゴメンゴメン。だってドキドキしちゃってさー」

フンと鼻を鳴らす。

「あーバスケしてー」

「まあまあ落ちつけよ」

「真実、放課後にバスケするんだしさ」

茜が立ち上がりながら言った。

「そうだけど？俺は嬉しいことがあるとバスケしたくなる？」

「それでさらにテンションあげるってか」

朝弥が棒付き飴を口の中で転がす。

「そう？さすが朝弥」

「昔からそうだもんな真実は」

由輝が苦笑した。由輝の手が目に入る。

あれ？

「由輝、何、怪我したわけ？」

指に絆創膏をしているが、それが前俺がやったやつじゃなくなっている。

「そう」

「俺があげたのは？」

「使い切った」

「マジか。1箱丸々あげたのに」

「弓弾いちゃってさ。その上俺貼るのへたで。またちようだい」

「いや、いいけどさ」

中庭に移動して木の下に座る。丁度日陰になって木漏れ日が揺れた。涼しい。

「さあ皆の衆。ここからが本題だ」

「「「おう？」」」

「朝弥と茜はまあいいとして、問題は俺と真実だ」  
輪になるように座って顔を寄せ合わせる。

「2人共、毎日それぞれの部、活動してるもんなあー」

「休みの日ないわけ？」

「弓道は水曜」

「バスケも水曜」

「あ、じゃあ水曜だけ活動ってのは？」

「それじゃ部立ち上げる意味がないでしょ」

茜につっこまれた朝弥が飴を噛み砕いた。

「依頼がきたらこつち活動ってのは？」

「うん、まあいいんじゃないの？」

「じゃ決定？」

翌日、カマさんから部室の場所と鍵を渡された俺達はさっそく行ってみることにした。

「では、いきまーす？」

由輝がニヤリと笑う。

「「「イエーイ？」」」

鍵を差し込んで回すと音をたてて鍵があいた。ノブを回して開ける。

「じゃーん？……うっ……」

「なんだこれ……」

「埃がすごいな……」

中に入って窓を開ける。

「あ、けどいい位置じゃん。校門とグラウンドがよく見える」

茜が目の手をかざして言った。

「よし、じゃちよっくら掃除道具借りてくるわ？」

朝弥がドアを開けた。

「お、なんか行動的だな」

「茜が気に入ったからな」

新しい飴を啜えた。それを見た茜が隣に立つ。

「じゃあ僕もいこうかな」

由輝と顔を見合わせる。ニヤリと笑った。

「好スタートだな」

「ああ」

朝弥と茜が鼻歌を歌いながら出て行った。



顧問と部室（後書き）

次は夕さん！

大掃除（前書き）

夕です！

## 大掃除

もとからあったテーブルとかイスとか、棚をパタパタすると、埃が立ち上った。

「ゲホツ……朝弥、窓開けて」

「はいはい」

朝弥が窓を開けると気持ちいい風が入ってきた。

「に、してもさー、この部屋どんだけ使ってたんだろーな」

「何年間かほつたらかしたったのかねえ」

雑巾がけしてる朝弥を飛び越える。

まじめにやってるみたいだね。うん、珍しくエライ！！

「茜ー、これ終わる気がしないー」

「もうすぐ2人共来ると思うけど」

今日は火曜日で、由輝と真実は部活中。

だから僕と朝弥だけで掃除してるってわけ。

依頼がないかぎり2人は休めないから。

あれ、でも依頼がたくさんだったら2人共部活はどうするんだろ。

「掃除終了ー！！茜、次は？」

それくらい自分で考えなさい。

「床はキレイになったじゃん」

「オレのおかげだ！！あ、次はテーブル拭くなー」

「僕もここ終わったらすつち手伝うよ」

はたきから雑巾に持ち替えて棚の上を拭く。

あっという間に真っ黒になった。

バケツにぶち込もうと振り返ると朝弥がテーブルからイスに移っていた。

「うりゃあああーっ！！」

なんかすごい笑顔で一心不乱にイス拭いてる。

それ、そんなに楽しいですか？

「イスも終わり！！茜、全部終わったぞ！！いやー、楽しかったー」  
楽しかったんですか、そりゃよかったです。  
じゃあついでに棚もやってもらおうか。

「朝弥、僕はバケツの水捨ててくるから、棚の上も……って、もうやってんのか」

と、まあそんなわけで僕が戻ってくる頃には棚の掃除は終わって、得意気な朝弥がイスに座っていた。  
単純作業が好きな人って便利だなー。

今日、また新しい朝弥の使い方を発見してしまった、かも。

「2人でも終わるもんだなー」

僕も朝弥の向かいに座る。

「今、何時？」

「んー…なんだよ、この部屋の時計止まってんじゃん！！」

「うわ、ほんとだ。朝弥、ケータイ持つてるよね？時間見て」

「5：45…ですねー。そろそろ部活終わるはず」

ちょうど朝弥がそう言った時、ドアノブの回る音がした。

ドアが開いて由輝と真実が入ってきた。

「おおー、すっげえキレイになってる！！」

「床も全部拭いてある」

「待ってました！！2人共！！」

2人共まっすぐテーブルにきて座った。

「すっげえだろ！！俺頑張っただろ！？」

「僕もやったんだけど、ちよつと」

ほとんど朝弥だけど。

「お疲れさん」

真実も由輝もすっごい汗かいてる。走ってきたの？もしかして。

と、ドアがまた音を立てた。

「ん？誰だ？」

音はガタガタするものの、何故か開かない。

「イタズラか？」

真実が立ち上がる。

「心霊現象だったらどうする？」

「んなことゆるいな、茜!!」

と、言いながらも、カメラを構えているのは何故？

「見てくるか？」

由輝がドアの方へ歩いていった時、ドアが開いた。

「わっ」

「あら、引くドアだったの？」

入ってきたのは……カマさん、だった。

「4人共まだ残ってたのねえ。早く帰りなさいよ？」

カマさんは、ズカズカ部屋に入ってきて、品定めでもするかのように、グルリと見回した。

「結構掃除したのねー」

「だろっ？俺……」

「2回目」

「でっ!!」

由輝の肘が朝弥の腹にクリーンヒット。

へえ、由輝も朝弥のしつこさにはキレルんだ。

「で、カマさんはなんで来たんすか？」

「ああ、そうそう。4人にいいものあげようと思ったのよ」  
後ろ手にゴソゴソしてる。

なんだろな。

「これよ。使えるなら使ってちょうだい」

カマさんが持ってきていたのは、お手ごろサイズの箱。上の面に穴開けたやつ。

「昔、なんかの部が使ってたポストなんだけど、使えるんじゃないかしら」

少しボロいけど、ここに依頼を入れてもらうってわけさ。

「カマさん!!」

「ありがとな、カマさん」

「カマさんならやってくれると思ってたぜ!!」

「カマさん最高!!」

箱を真実が受け取った。

「あのねえ…あんだ達…カマさんは止めなさい。まあ、いいわ。今日はそろそろ帰りなさい」

カマさんはドアを静かに上げて聞いて出て行った。

真実の持つ箱に視線が集まる。

やっと活動開始、かな。

この箱に依頼が入ってくれば、きっともつと面白いことになってくんだろっな。

大掃除（後書き）

次は秋雨さん！！

3 (前書き)

秋雨です！



カマさんがくれた箱を修理して目安箱を作った。それを設置した次の日の放課後、オレと茜で目安箱の中身を見てみた。

中にはけっこうな量の紙が入っていた。

「すげえ大量！やったな、茜！」

「あー、うん、そうだね」

目安箱を部屋に持っていき、中身を出す。

さっそく内容を拝見！

「……………なんだ、これ」

「紙」

「そうじゃなくてさ」

内容はオレらをバカにしたような感じだった。

持っていた紙を投げ捨てて、次の紙を試してみる。

これはひやかし。

ぐっちやぐちやにして捨てる。

次。

これもひやかし。

「なんだよ、これ！」

ビリビリに破く。

「だから紙だって」

「じゃなくて！なんだよ、この内容！」

「ひやかし、ひやかし、ひやかし、ひやかし、ひやかし」

「ひやかししかねーし！」

こんな目安箱の中に入れんな！

「茜ー、これすてよーぜー」

「だめ。まだ全部見てない」

「どうせ全部ひやかしだろー？」

「依頼があるかもしれないだろ？ほら、朝弥も見ろ」

「えー……」

「文句言わない」

「へーい」

しぶしぶ紙を手にとって中を見る。

それから10分程度たった。

「あっ」

「どーした？」

「依頼、あった」

「マジで!？」

持っていた紙を投げて、茜のほうに行く。

「ほら、これ」

紙を渡される。

キーホルダーをなくしてしまいました。探してください。

1年

D組 平方 咲

たしかに、ちゃんとした依頼だった。

「よっしゃー！茜、由輝と真実を呼びに行くぞ！」

「そうだね」

茜が立ち上がる。

そこを狙って茜の手を掴む。

「まずは弓道場だ！」

茜を引きずって走る。

「あー……」

茜の声は無視！

走ったおかげで、弓道場に着くのが早かった。

目の前には大きな扉。

相変わらず存在感が大きいな！。

「ほら、行くよ」

「おー」扉を開けて中に入った。

3 (後書き)

み、短い……次はプー太さん！

始動（前書き）

プー太です！

## 始動

精神を集中させて矢を引く。  
的の狙いもちやんと定まった。

ググツ 弓のしなる音が静かな道場に響く。

「由うー輝いー！」

「うわっ！」

手を放そうとした瞬間、名前を呼ばれた。

手がジンジンしたから見てみると血が出てた。

ばんそーこー…はないんだった。真実にもらわねえと。

指をくわえて大声で俺を呼ぶ朝弥バカの下へ行く。

「ていやっ」

「っ！」

未だに言い続けるもんだからチョップをくらわせてやった。

「茜コイツどうしたわけ？」

「初めての依頼が来たから呼びに来たんだよ。今、大丈夫そう…？」

「んー…部長いねえし、いんじゃね！」

弓を指定の位置に置いてくると体育館へ向かった。

「まーことっ！」

「ん？」

朝弥が手をブンブン振り回して真実を呼ぶ。

依頼のことを告げると快く承諾してくれ、俺たちの初めての仕事が  
始まった。

「キーホルダーか…どんなやつか書いてある？」

「いや、書いてないよ。でも依頼主の名前ならある」

「なら本人に訊いた方が早そうだな」

「1-Dの平方サン…？」

見たことある気がすんだけどなあ、どっかで。

「平方 咲さんさきっている？」

真実が言う。

「もう帰ったのかも。号令かかってすぐに教室を出てったから」

「そっか、ありがと」

「本人いねえならどうすんだよ。何探せばいいのかわかんねえじゃん」

さて、どうしたものか。

「…まだ校内にいると思うよ僕は。他人にまで頼って探す物なんだから、きつとどこかで探してる」

やけに真剣な茜。

その言葉は間違いじゃない気がする。

「じゃあ最初に平方 咲さんを捜しますか！」

「…ラジャー」「」

みんなバラバラになって捜索をする。

俺が向かったのは校舎裏。

理由はこれといって自分でわかんないけど、そこに行ってみたかった。

「平方さん、いるー？」

返事はなし。

いないのか。

次を捜すのもあれだし…ここらへんちよつと探しとこっかなあ。

地面や草を見たが、それらしき物は見つからなかった。

「あー腰痛え」

腰に手を当てて、仰け反る。ボキボキって音がした。

「んあ？」

あれ何だ？

上を向いたら、木の葉の中で何かが反射した。

念のため、木に登ってみる。

うわー、袴動きにくっ！

「あと少し…とれた！」  
何だこれ。

キーホルダーっていう部類に括れるんだろうかコレ。ま、いっか別に。

チエーンの部分の指に引つ掛けてクルクル回して遊ぶ。

あ、平川さん捜さねえといけねえんじゃん。

遊ぶのをやめて手に握ると平川さん捜しに戻った。

「いたぞ平方さん」

「あー！この人が平川さん！？俺知ってる！」

「いや、平方さんだからね由輝」

真実に連れてこられて来た平川…平方さんに見覚えがあった。

「なんであんたがここにいるのよ！」

「そっくりそのままお返ししてやんよ！」

「由輝、平方さんと知り合い？」

「こいつ、俺のストーカー！」

「ちっ、違うわよ！廊下の角を曲がるたびにコイツが私にぶつかってくるのよ！」

「お前がぶつかってんだって！」

平方 咲ってコイツだったのか…。

名前からおとなしい感じの子だとばかり…。

「どつどつ。…で、平方さん。俺たち君のキーホルダーを探してるんだけど、特徴とかあったら教えてほしいんだ」

「えーっと、その…普通よ！ごくごく“普通”のやつだから！」

って、あんた達が万屋同好会だったの！？うわあ…やっちゃった

「キーホルダーの普通ってなんだよ。何を基準にしてんだよ、お前」

「うっさい！」

普通、普通って…。

その普通が何だっつーの。

「と・に・か・く!“普通”なの！モンスター系じゃないから！よろしくね！」

モンスター…。

俺がさつき見つけたやつもそんな感じだった気が…。

「わかった。そのキーホルダーは僕たちが必ず見つけて届ける。約束する」

「ええ」

「よし由輝、真実、茜えー！そーさく開始だあ！」

「「「おー！」」」



始動（後書き）

次は緋紹さん！

モンスター？（前書き）

絆紹です！

台風が大変ですね、皆さん、お気をつけてー！

モンスター？

草を掻き分けてキーホルダーを探す。

「どこだー？つーかどんなやつなんだ！？」

由輝が後ろで喚いている。俺は茂みで見つけた土まみれのペットボトルのキャップを摘んで土を払った。

「そうだよなあ。平方さん、なんで教えてくれないんだろ」

「せめて色だけでも教えてくれたらいいのに」

茜が草を千切りながら言った。

「おい、雫るなよ」

「いいじゃん、別にさ。草取りもついでにしてるってことで。悪いことしてるわけじゃないし」

朝弥が茜の横腹をつついた。小さく茜が悲鳴を上げて飛び退く。

「やめろよー！」

「いや、つい。ごめん」

朝弥が両手を顔の横に挙げた。

「もー」

茜が口を尖らせる。

「でもさー、なんで俺ら外探してんの？落とし穴なら普通中じゃね？」

俺がそう言うのと他3人がピタリと動きを止めた。

「……………え？」

「そうだよなー普通中だよなー」

朝弥が背伸びをした。言った。

「すっかり緑の魔力に取り憑かれてたね」

真剣な真顔で茜が賛同する。

「何、緑の魔力って」

「いや、落とし物っていうとつい茂み探したくなんない？」

「なんねーよ！」

中の廊下を曲がる。

「うわっ」

「っ！」

由輝と誰かがぶつかった。

よろめいた相手の腕を慌てて由輝と俺で掴む。

「すいませ……」

「あ」

平方さんが由輝を見て声を出した。

「あ、平方！……さん！またか！」

由輝が平方さんの腕を離して言った。その声には驚きと呆れが混じっている。

「あなたこそ！」

その言葉に平方さんは噛み付くように反論した。腕を離して平方さんを見る。

どうやら彼女もキーホルダーを探していたらしい。

「あ、丁度いいや、平方さん。キーホルダーのさ特徴もっ少し教えてくれない？」

思い出して問いかけると平方さんは考えるように口の前に握り込んだ手を当てた。

あれ、もしや聞いちゃダメパターン？え、マジで？

「あ、ダメだった？」

「うっん。え……っと黄緑かな」

「黄緑、ね……」

「一応さ、いくつが見つけたから見てもらえる？」

茜がポケットから見つけたキーホルダーを出して見せる。

「あった？」

「うっん……」

「大切な物なのか？」

いつの間に取り出したのか朝弥が口の中で棒付き飴を転がしながら言った。

「大切…うん…まあ、うん、大切、かな」

「ふーん」

朝弥が写真を撮る。

「なっ、何!？」

「いや、部の活動の瞬間を納めようと思って」

「びっくりしたー」

「じゃ、俺達落とし物入れに行つてついでに見てくるよ」

「うん、ごめん」

「じゃ」

平方さんが行つた後、由輝が声を出した。

「あ」

その声に由輝の方を振り返る。

「どうした？」

「これ見せるの忘れた…」

ポケットから変なキーホルダーを見せる。モンスター？

「後ででいいんじゃない？」

「そっか、そうだな」

落とし物入れの方に歩き出した。

モンスター？（後書き）

次は夕さん！

あやしい…(前書き)

夕です！

あやしい…

いちおう落とし物入れのどこまで来てみたけど…入ってるのは。

「シャーペンとか消しゴムばかりだな」

真実が溜め息混じりに言った。

「キーホルダーは？」

「あつた。一個だけ」

真実が由輝に投げて渡したのは、…黄緑の、鈴？

「あ、黄緑。それじゃないの？」

鈴を受け取って見てみると、ハートかなんかの細工がしてあつた。揺らすとチリチリいい音がする。

「茜、オレにも見せて！！」

「いいけど、壊さないですよ？」

「オレ、そんなことしねーし！！」

朝弥の手に渡ったキーホルダー。

その後も由輝、真実と回って僕のとこまで戻ってきた。

これ、平方さんっぽくない？

女子ってこういうのが好きなんですよ？

僕にはよくわかんないけどさ。

「平方さんどこ行ってみるかーあ」

「由輝、なんで嫌そう？」

「真実にはわからないだろうけどさー、…まあ、いいや」

「なんで！！」

こうして再び平方さんを捜すはめになった僕達だった。

「いた？」

「こっちはいなかった」

「オレの方にもいなかったー」



3人と合流する。

僕も平方さんらしき人には会わなかった。

「あと、行ってないのって…?」

「裏、だな」

由輝の一言で僕らは校舎裏へ。

いないと思うけどさあ。

校舎裏への角を曲がったところで先頭を行っていた由輝と朝弥が誰かにぶつかつた。

「って」

「なんなのよ!」

「カメラは無事かああ!」

それぞれがそれぞれの声を上げて、一斉に静止した。

「あ、平方さん」

「げっ、またあんた?」

「よかつた、無事だ!」

平方さん、まだ残って探してたんだ。

僕達、万屋同好会に頼んだ上に、自分でも探すなんて、よっぽど大事なんだ。

「ところであんた達、私のキーホルダーは見つかったの?」

ポケットに突っ込んでたキーホルダーを見せる。

「これ?落とし物入れにあつたやつ」

平方さんは首を横に振つた。

「違う。こんな凝つたやつじゃなくて…ふ、普通の!」

なんだ、違うのか。また探し直し?

「じゃあ、もう一度校内探すか!」

なんでか楽しそうな朝弥につれられて平方さんの横を通り過ぎた時、由輝が何か思い出したらしい、あつと声を出した。

「また忘れてた」

由輝が持っているのは黄緑のモンスター?

「おい、平方…っておい!これ違うか!」

もう角を曲がろうとしていた平方さん、由輝の声で止まる。

そしてキーホルダーを見て、一瞬固まった。

「ち、違うわよ!!!そんな気持ち悪いの!!!」

走っていっちゃんだった。でもさあ、これってなんかあやしいよね？

あやしい…(後書き)

次は秋雨さん！

3 (前書き)

秋雨です！

もう遅いから、ってことで、今日は解散になった。

その時を狙っていたかのようにバスケット部と弓道部の部長さんが来て、真実と由輝を連れて行った。

その写真もバツチり撮ってるぜ！

帰り道。

茜が上機嫌だった。鼻歌つきで。

めずらしー。一枚撮るところ。

と、茜にカメラのレンズを掴まれた。

「朝弥ー、何撮ってるのかなー？」

さっきの上機嫌な顔から一変して黒い笑顔になっていた。

「そりゃあ、茜の顔に決まって……」

「そうか、そうか。朝弥はカメラを壊されたいのか」

レンズがピシピシと音をたてはじめた。

「レンズが割れるうううううう！！茜ええええええ！！！！」

「……………チッ」

茜は手を離してくれた。舌打ちつきで。

カメラは！？……よし、無事だな。

カメラは壊れてないし、茜の珍しい顔も撮れたし、いいことだらけだな。

あ、そういえば。

「茜ー、なんであんなに上機嫌だったんだ？」

「はぁ？……………あー、あれか」

思い出したのか、また機嫌がよくなった。

「教えてくれっ」

「えー」

「教えてくれよー」

「どーしよっかなー」

「いいだろー？」

「んー、えー。まあ、しょうがないなー」

茜が教えてくれるって、どんだけ機嫌いいんだ！？  
鼻歌歌ってるし。

「僕、平方さんの落とし物わかった」

「え！？なんだったんだ！？」

「由輝が持ってたあのモンスターのやつ。推測だけど」

「あの黄緑の？でも、本人は違うって……」

「でも、あれで間違いないと思うんだ。どんな理由かは知らないけど、人前で返されたくないんじゃない？」

あー、なるほど。ふーん。

「乙女心はわかんねーな」

「わかってもどうかと思うけど」

そりゃそーだ。

「でもさー、どうやって返せばいいんだよ」

「僕に考えがあるんだ」

おっ、流石茜！

「どなんだ？」

「封筒にモンスターのキーホルダーと、消しゴム、シャーシン等を入れて平方さんの机の上に置く。この中から取って、って感じの紙を添えてね。そうしたら、誰にも見られずにあのキーホルダーを返せるでしょ？」

なるほどー。

「茜は頭いいーな！」

「どーも」

解決策も見つかったし、封筒もあるだろうし、準備OK。

「明日実行だーっ！」  
「おー」

### 3 (後書き)

次は、プー太さん！



一件落着(前書き)

プー太です!

## 一件落着

次の日の朝、茜に5時に起こされた。しかも電話で。

「電話出るの遅いよ。6時30分に学校に集合してね」

開口一番にグチ。その次は…待ち合わせ？

あくびをしながらベッドから出る。

うわぁ…寝癖があぁあ！にーちゃんみたいになってる！ギャル男かよ！

ブルルル

「あ、真実。もしもし？…うん。15分くらいに待ち合わせでよくね？んじゃ」

それから寝癖を直そうとしたけど直んなかったから、そのままにして登校した。

「…秋良さんかと思った」

「そんなに変わる？なんかイメチェンした気分…」

真実に言われた後、2人には俺が誰か気付いてもらえなかった。

「まあ由輝の髪は置いといて、こんなに早く呼び出したのには理由があるんだ。由輝、あのモンス…キーホルダー持ってる？」

「ああ持ってる」

「なら真実と届けてきてあげてよ」

「は？」

茜のメガネがあやしく光って、ニヤリと一瞬不気味な笑みを浮かべた。

「平方さんの机の上に置いておくんだよ、数種類ね。そうしたら彼女が取りに来ないで済むし、いろいろといいんだよ、僕達にも彼女にも」

手に4つくらい（昨日落とし物入れで見つけた物もある）キーホルダーを握らされた。

「行ってらっしゃい」

「でも俺らじゃなくてもいいじゃん別に。なあ真実」

「確かに」

「い・け」

「はいただいま！」

ゴゴゴゴと茜の後ろに黒い物が見えたから一目散に駆け出した。

「…さて、僕は帰って寝ようかな」

「んじゃオレも。でさ、オレが来た意味…」

「何か文句でも？」

「いえ、ないです。これっぽっちも」

「なー、どれが机かわからなくね？」

「出席番号順だろ。ほらあれに書いてある」

「頭いいな真実。高校入ってから頭よくなったのか？」

「……………。違う気がする」

平方の席到着。渡されたキーホルダーを置いて…これでよしっ

「いやいやいやいや。そのまま帰っちゃまずいだろ。本物のキーホルダー置き忘れてるぞ」

「……………。アツハツハ！わざとに決まってるんだろ真つ実クン！」

ああ俺、なんで真実と一緒になのかわかった気がする。

「えーっと、“この中に平方さんのお探しのものはありますか？違った場合は落とし物入れに戻してくれると助かります”っと。こんなもんだろ」

「じゃー任務完了ってことで」

「…一件落着！！」

パチンツとハイタツチ。

やっぱいい気分。なんかいいな、人助け。

「早く次の依頼こねえかな…」

後日談

「なーなー、平方のキーホルダー事件ってさ、結局モンスター捜索だったじゃん。あのモンスターが大事な物って…。いろんな人がいるもんだな」

「お前が言うなよ変人のくせして」

移動教室中に廊下を歩いていると角にさしかかる。

ドンッ

「きゃっ」 ポロリ

「うおっ」

いってーなあ…って！

「またお前か！」

「あんたこそなんなのよ！」

「朝弥、茜、アレ」

「…あ、モンスター」

一件落着(後書き)

次は緋紹さん!

告白！（前書き）

緋紹です！

告白！

「好きです」

俺は大口を開けずにはいられなかった。

ぬわんどうあつてえ！？

思わず耳をそばだてる。

まあそばだてる必要もないほど近くにいるのだが。

「付き合ってください、北村君」

東山 真実 16歳。

人生初にして人が告白されているのをこの目にしました。

「だから？そんなんじゃないったら？」

「なーにがそんなんじゃない、だよ。モテモテじゃなーか」

「たった1人に告白されただけだろ」

「そのたった1人を捕まえるのにどれだけ苦労がいるかご存じかね？北村君」

「そつ、それは…っ」

「おはよー」

「おつす」

朝弥と茜が教室に入ってきた。

「はよつす。なあ聞いてくれよ。朝、こいつさ」

「おはよう？」

由輝に口をふさがれる。

「何すんだよ」

由輝の手をどかして小声で怒る。すかさず頭を軽く叩かれた。

「バカだろお前？人様のプライバシーの重さを知れ？」

「おうやその様子じゃ俺が知ってる以外にも告白されたことが御有

りのようだね?」

ギクツと由輝が固まる。

その様子を見て興味津津に2人がカバンを置いて寄ってきた。

「えー、何々、由輝」

「告白されたんだ?」

俺の隣に茜が座り、由輝の隣に朝弥が座った。

由輝が溜め息を吐いて俺を睨んだ。

「やだ。由輝が俺に流し眼を…」

両手で頬を挟んで顔を背ける。それを見た茜と朝弥が便乗した。

「ええっ? そんなまさか?」

「早まつちや駄目だ由輝。帰ってこい」

「ノるな? 真実に流し眼なんて送ってないよ?」

「ゴメンゴメン」

不貞腐れたように由輝が唇を尖らせた。

「で? 告白されたって誰に?」

茜が体を乗り出した。朝弥も乗り出す。

「……吉野……」

「吉野? へえ美女じゃん? やったな由輝?」

「もちろんOKしたんでしょ?」

「こいつ断っちゃったんだよー」

「「なんで!?!」」

吉野 吉野<sup>よしの</sup> 初流<sup>はる</sup>は映研部の1年ルーキーで結構可愛い。

なかなか可憐な姿をしている。

にも関わらず断りやがったこいつ?

「謝れ? 全国の吉野ファンに謝れ?」

「全国つて……」

「そーだそーだ?」

「無反者?」

「だー? ちよつと黙れ?」

野次を由輝が手を広げて制す。



ピタツと野次が止まった。

「皆の衆落ち着くがよい。顔をこちらに寄せい」

「……何事だ」「」

体を乗り出して顔を寄せる。

「仕方ないだろ、恋愛的には好きじゃないんだからさ？」

「でーもーさー」

「無理してつきあうのは失礼だし」

「う……」

思わず口を閉じた。耳が痛いぞ。

「由輝って……紳士だよね」

「なあー」

「なあなあ、そのの4人？」

同じクラスの男子に声をかけられた。

「変な部始めたんだって？依頼来たのかよ」

「1件解決したところ？お待ちしてます」

平方さんの件で全校生徒の大半に我が部の存在が知られたらしい。

もつと依頼くるかな。

平方さんが友達とか部活で話してくれたおかげだ。サンキュー？

その3日後。

朝弥と茜が由輝を従えてバスケット部に来た。

「失礼しまーす」

バッシュを脱いで体育館を出る。

「こらー東山ー？」

「すみませんっ、ちよつとだけ？」

ドアを閉めて声を遮る。

「依頼？」

「そつ？それもさ？」

「映研部からなんだよ？」

告白！（後書き）

次は夕さん！

いざ映研部へ(前書き)

夕です！

## いざ映研部へ

「俺は行かねえ？」

「いいじゃん、由輝。せつかくの依頼なんだからさ」

僕は映研部の部室の前にいる…んだけど、由輝がなかなか入ってくれないんだよね！。

「なんで今なんだよ？吉野がいる、俺はここで待ってる？」

「由輝は依頼内容聞きたくないの？オレは聞きたいけどなあ」

「俺も。映研部だぜ、映研部」

「僕も内容知りたいな」

だって2つ目の依頼で個人からじゃなくて、部からなんだから。有名になったねー、うん。

「俺だつてそりゃ聞きたいけど…あ”あああつ…」

変な声で唸っている雪を無視して、真実がドアをノックした。

「これも由輝のため？失礼しまーす」

ドアが開いた。

「…もしかして、万屋同好会？」

「はい」

出てきたのはのほーんとした男子生徒で、たぶん3年だと思う。

「来てくれたんだー、あ、入って入って」

『失礼しまーす』

1歩中へ入ると、そこにはよくわからない機械がいつぱいあった。

そして5人ほどの男子生徒がいた。

ん、あれ？

「吉野さんは…？」

「んー？ああ、吉野さんは欠席だよ。3日前くらいから」

「3日前…」

それって…

「由輝が告白された日じゃね？」

朝弥にニヤリとされ、由輝の顔が引き攣る。

ふーん…吉野さん学校休んでるんだ。

よっぽどシヨックだったとみえる。

「俺は喜ぶべきなのか、落ち込むべきなのか」

「落ち込むどけっ」

「ええっと、いいかな？」

ドアを開けてくれた男子生徒さんが苦笑しながら言ってきた。

「吉野さんが休んでる理由はだいたい分かったよ。で、依頼なんだけど…」

「どんとこい？」

朝弥が胸をはる。

「頼もしいねー。今、作ってる映画のことなんだよ、これ」

見せてくれたのは台本で、かなりのページ数。

タイトルは…『悪ノ娘』？え、これって…

「これ、歌ですよね？」

「うん、詳しいね」

「姉がうちで聴いてました。歌を映画にしたんですか？」

「そうだよ」

すごいな、映研部。レベル高っ。

「俺も知ってる」

「俺もー」

「オレもー」

お、全員？けっこ有名人のかな、あの姉さんが聴くくらいだからあんまり知られてないのかと。

「で、ここで問題が起こっちゃったんだよね。実はこれ吉野さんが主演なんだよ」

ナイスキャスティング？って叫びそうになった。

うん、吉野さんピッタリだと思う。

「でも、その主演の吉野さんが休みだしちゃったんですね」  
「真実が由輝をちらっと見て言った。」

「しかも台本を書いたのも吉野さん。映研部には彼女以外の女子はいない。映研部初めてのピンチってわけ」

「だからオレらが呼ばれたのか」

朝弥がまたもやどこから出したのかアメを転がす。

「そう。お願いしてもいいかなあ？あ、僕は高坂こしざか護まもる、映研部部长、いちおうね」

それから部長さんが依頼内容を教えてくれたんだけど、ちょっと困ったことになってる。

「さあどうする？」

「俺は憤んで辞退します？朝弥は？」

「オレにはムリ？由輝だろ」

「嫌に決まってるんだろ、そんなの。茜は？」

「僕も絶対やりたくない」

僕らが何を押しつけ合ってるのかと言うと…そう、主演。

吉野さんの代わりに主役を演じてくれて言われたわけ。

もちろん“娘”はできないからタイトルを『悪の王子』に直してやるんだって。

「僕は台本やりたいから」

その台本も吉野さんしか書けないから頼まれてしまった。

「いいよね、文芸部だし」

「茜、お前は名前だけだろ？」

「いいよね？」

「……」

あはっ、いち抜け。

「んじゃ…3人でジャンケン？負けた人が主演で」

溜め息混じりに真実が言う。

「そうだな、覚悟はいいか？」

なぜか楽しそうな朝弥。

「「「ジャーケンーン…ポン?」「」」

どれどれ?

「ぐあああああっ」

「やりいつ、真実が主演なっ」

そんなこんなで始まった2つ目の依頼。

すっごい楽しめそうなのは、僕と朝弥だけ、かな?

いざ映研部へ（後書き）

ジャンケンの結果

真実…グー

由輝…パー

朝弥…パー

以上っ、次は秋雨さん！



3 (前書き)

秋雨です！

それから数日後。

「台本できたよー」

茜が台本を持ってきた。

さっすが茜。やるのが早い！

「いやー、大変だったよー」

そう言ってるわりにはすっごく楽しかった雰囲気……。

「見ていいか？」

「もちろん」

真実が台本を受け取りペラペラめくる。

両隣にオレと由輝が行く。

読んでいくうちに真実の顔が青くなっていく。

最後まで読むと真実は音をたてて台本を閉じた。

オレまだ読めてねーのに！

「俺、ぜつつつつつたいやらない！」

真実のやらない宣言。

「えー、なんでさ」

「だってこれ！……これ……」

俯いて肩を震わせる。

「最後に死ぬじゃん！」

えー、そんなことかよー。

「それぐらいがまんしろよなー」

「なら朝弥がやれよ」

「オレ、やらねーし」

「ジャンケンで負けた真実が悪い」

「？……。とにかく、おれはやらねーからな！」

真実、逃走。

「あつ、逃げた」

「追ったほうがいいのか？」

「そりゃ、まあ」

「よし、由輝行くぞ！」

由輝の右手を掴んで走る。

「うおっ」

由輝が茜の右手を掴む。

「ん？」

由輝は茜を道連れにした。

「まっことーっ？」

道行く人々をふつとばしながら真実を追った。

数十分後。

真実は追い詰められていた。

「もう観念してよね」

「いやにきまつてんだろ！」

「あきらめわりいなー」

さて、どうしようかと困っていると、由輝が真実に近づいた。

真実の肩に手を置く。

「……真実」

「由輝……？」

由輝の手が真実の肩を掴む。

「あきらめなさい」

真実、逃げ場なし。

「ナイス、由輝！」

「そのまま映研部に行くよ」

いまだに暴れる真実を由輝が引つ張って行く。

じゃんじゃん写真を撮ってやる。



3 (後書き)

次はプー太さん！

立ち位置的な？（前書き）

プー太です！

## 立ち位置的な？

「すっげー…のめり込んでるなあ、真実」

「バスケやらすのがもったいなく感じるまでにね」

腹をくくった真実は本気で演技をしている

見ててこっちがゾツとする。俳優顔負けだ。

「シャッターチャンス！フフツツ、いいのがいっぱい！」

茜はその様子を見て何か企んだような顔してて、朝弥はシャッター  
きらしまくって…

なんかつままないんだけど、俺。

1人だけ取り残された気分。

「はい 10分休憩ー！」

ぼけーっと眺めていると休憩になった。

真実がこっちに来る。

「なあ、真実」

「……………」

「真実！」

「…あ、わりい由輝。今ちよつとセリフ覚えるのが大変でさ」

それだけ言つと台本と睨みあって熱中してしまった。

「朝弥、ちよ…」

「話しかけないで！今すっごいいいとこ！」

朝弥も駄目か。 なら、

「茜。なんか俺にすることない？」

「うーん、ちよつと待っててくれない？あと10分もあればこれが終わるから」

真実も朝弥も茜も駄目。

俺って用なし？

だったら俺 ここに意味なくね？

また練習が始まって、それぞれのことに集中してる3人を見ると

胸がムカムカする。

だからか知らないけど、俺は一人で映研部を後にしていた。

屋上に来て、朱くなり始めた空を仰ぐ。

…何してんだ俺。依頼中だろ。

髪を掻き乱し、大きな溜め息を吐く。

胸のムカムカは消えない。むしろでっかくなった気がする。

「やっぱり戻んねーと…だよな」

重い重い腰を上げた。映研部までの道に行く。やっぱり気がのらない。

「はあ…。うわっ」

「きやつ！つてまたあんだね！」

また平方と激突。かんべんしてくれよ。

「ストーカーですか平方サン」

「んな！？なわけないでしょーが！あんだこそ！」

「はいはい。じゃーね」

「ちよつと待ちなさい」

肩を掴まれる。

「あんだ元気ないけどどうかしたの？」  
は？

「平方さんに関係あんの」

なんかイライラする。

「ないわ。これっぽっちも。でもね、そんな顔してる人をほおっておけるような人じゃないの私は」

「だから？」

「この前のお礼に相談にのってあげるって言ってんの！」

私にまかせなさい！みたいなノリで胸を叩く平方に、つい笑みがもれた。

「ほら言いなさいよ、吐けば楽になるもんよ？」



「…しょーもないことだから笑うなよ？」

「ええ。もちろんよ」

二カツて笑う平方に、俺はさっきの事を全部吐いてしまった。言ってる内に依頼の内容も少し言ってしまったんだが、吉野さんのことは伏せておいた。

「うーん…そうね、わかったわ。要するに仲間はずれにされた気持ちになつたわけね。あんた達は常に一緒にいて、異常に仲がいいから、ふと1人になってそれを感じたってわけ。おわかり？」

「なんとなく」

「それで、みんなに無視されたのがあなたは嫌だった。そうね？」

「……………そんなカンジ…かも」

？う 今のはちよいハズい。けど、平方は笑わずに真剣に聞いてくれる。

そこはありがたかった。

「なら自分から環に入りなさいよ。私が思うに、あんたは皆と心のどこかで距離をとってるのよ、きつと。じゃないと普通ならそこで食い下がらないもの友達って」

距離…？

「だ・か・ら！今から戻ってやってみなさい。差し入れなりなんなり持っていけば自然に入れるから“環”に。それで駄目だったら気持ち正直にぶつけてみなさい。それ以外の解決方法は私は知らないから」

「…そういうもん？」

「ええ。そういうもんよ人間って。ほら行きなさい早く」

「りょーかい。サンキューな平方！」

「どういたしまして。私こそこの前はありがとう！」

うん、なんかスッキリした。

平方に話して正解だったな。

「何を買おうか…。もうここは飲み物でいっか別に」

自販機で大量に買い物をして映研部へ戻る。今度は足取りが軽かつ

た。

「差し入れどーぞ！」

「……どこ言ってたんだよ！」

「ちよつとねー」

1人1人にジュースを配る。みんな無視はしなかった。平方の言った通りだ。

「お勤めご苦労ー！」

「差し入れどーも。でさ、ここどうやったらいいと思う？」

「もっとこうダイナミックに……とか？」

「いやここはそんなんじゃないぞ由輝」

「由輝！ジャツジャー！王子様そのものだろ！」

「すっげー！カメラマンだな！本物だその腕は！」

「ねえ由輝、僕こんなの考えたんだけど」

「プツ それは流石にキツくね！？」

俺、ちゃんと環に入れてる。

「でさ……俺って何かすることある？」

「……そこで見とくこと！」

けど、なんかビミョーだ。

立ち位置的な？（後書き）

次、緋紹さん！

へーんじゅっ！(前書き)

緋紹です！

へーんしんっ！

役にのめり込むのは結構簡単にできた。劇の練習みたいで楽しかったし、その上周りも恥ずかしがってやったりしなかったし。ただし。

いざ撮影となるとあの問題が出てくる。

そう、それは衣装だ。

なぜか我が映研部は本格的で、衣裳係とやらがいるのだ。

ついこの間採寸され、そして放課後。

赤い布地に白の糸で繊細な刺繍が施され、肩には金色の結われた紐が飾りとしてついたロングコートのような上着に同色で横に刺繍の入ったズボン。

下のシャツはよく使ったなというほど見事なレースに白いビーズが縫い付けてある。さらになんか見た目高級そうな黒光りするブーツを履いた。

『水で落とせる染髪料？ 赤』

「…何これ」

手渡されたスプレーに書いてあった文字を茜に向けて首を傾げる。

「染髪料だけど？」

茜も首を傾げる。

沈黙が落ちた。

「…えっ！？何、この当たり前じゃんみたいな空気」

「えっ？当たり前前なんだけど。早くしてよ」

「は！？」

髪染めるのかよ？

突然の事実に関口をポカンと開けていると手の中からスプレーが消えた。

「あれっ！？」

「やんねーの？ちよい、屈んで屈んで」

朝弥が由輝とうおーい、うおーいと無駄に男らしい掛け声をかけあつて固まってる俺を肩で押し合つて椅子に座らせられた。

「あつ、おいっ」

「ほれほれ動くなつて。顔ついたらヤバい絵面になるぜ」

由輝が俺の頭にスプレーを振りかける。

「おっし完了！」

朝弥が俺がいつもくくってるように俺の髪をくくつた。

「くくくおおー」

俺が着替えるのを待っていた3人が感嘆の声をあげた。

「すげーすげー？真実、よく似合ってるぜ」

朝弥がバシバシ背中を叩く。

「うん。王子様そのものだ？」

親指を立てて由輝が頷いた。

「そ、そうか…？」

「じゃあ後は、ハイ」

「え？」

手の平に何か乗せられる。

見るとコンタクトだった。赤いワインカラー。カラーコンタクトだ。

「これで完璧」

満足そうにニヤリと茜が笑う。なかなか不敵な笑みだ。

溜め息をついてトイレに行つてコンタクトをはめた。

「うしっ」

トイレを出ると女子に会つて悲鳴をあげられた。

「え？」

「えー！？誰ー！？」

その声の高さになんとなく身の危険を感じた。片頬が引き攣る。

「し、失礼します？」

恐怖に身をまかせて逃げる。

なんで…っ？

「なんで追いかけてくるんだよー？」

奇声をあげて追いかけてくる女子は、まけると思っていたがすごい執念で追いかけてくる。

はつきり言って怖い。ものすごく怖い。

撮影場所に行つてドアを開けた。

「た…っ、助けて？」

慌てて中に入つてドアを閉めると廊下を走っていく音が聞こえた。

「何事？」

由輝がただ事ではないと思つたのか傍に寄つてきた。

「し…っ、知らない、けど…っ追いかけて、追いかけられたっ」

「あ、そう…」

どんなすごいことかと思気込んでいた分、白けた顔になった。

「ま…まじで、怖かつたんだからな？」

「いいじゃん。騒がれたわけだし」

朝弥が写真を撮る。

「撮るな？」

「撮るよ真実」

「だから撮るなつて…え？」

茜が丸めた台本で肩をポンと叩いた。

「映画。撮るよ」

「お、おう」

「じゃあシーン1いきまーす」

カチンと音がした。

へーんしんっ！(後書き)

次は夕さん！



臨機応変に（前書き）

夕です！

## 臨機応変に

「真実、お疲れ？」

いやあ、カメラ回ったら別人だね。

今撮ったシーンは真実演じる王子様が王座に座って家臣に命令してるとこ。」

「一発OK？」

「うっし？あー暑っちー…。」

コートをバサバサしてる真実に由輝が飲み物を渡す。

それを横目に見ながら、僕は台本チェック中。

次の場面はマンガを読みあさる王子様だ。

ここもたぶんすぐOKでると思う。

「茜ー、次はどんなやつ？」

「王宮での自分勝手ぶり、かな。あー楽しみ」

朝弥はずっとカメラにくつついている。

映研部の人撮影してるのに、やりたいらしくて…むしろ邪魔になつてると思うんだけどな。

「茜がごきげんだ…。」

「あれ、なんで逃げてんの？朝弥」

思いつきり笑顔で聞いてからまた台本に目を落とす。

王子は国民から奪い取ったマンガを読むのが好きで、今日も自分勝手に振る舞う。そんな王子にも恋する人がいて…それは山の向こうの白い国の…

ん？あ、あれ？

その場にいるメンバーをぐるりと眺める。

もしかして…僕、すっごいミスを？

音を立てず後ろへ5歩バック。

誰もこっちを見ていない？

後ろ手にドアを開けて、部室の外へダッシュした。

持ってきていた台本を読み直す。

王子が恋するは、山の向こうの白の王女。

そう、王女。王女、つまり女。

やってしまったよ…。

映研部の女子って吉野さんだけだったの忘れてた…。

そのまま男女逆転はまずかったなあ。

「こんな単純ミス、みんなに知られたくないし…」

「あれ？西川君？」

「？」

ずっと台本とにらめっこしながら歩いてたから正面から歩いてくるその人に気づかなかった。

「何してるの？1人って珍しいね」

「えーっと…」

「あっ、名前忘れてる？中元 舞だけど…」

そうだ、中元さん。

前に真実といい感じだった。

「で、何してたの？西川君が1人にいるなんて、何かあった？」

「別に」

「もしかして南沢君とケンカした？」

「違うよ。そんなんじゃないくて…ちょっと個人的なこと、かな」

「へえー、西川君にもそういうことってあるんだー」

え、僕ってどういう風に見られてんの？

「それ、何？」

「え？」

「それ」

中元さんが指差してるのは、さっきまで読んでいた台本だ。

「ああ、これは…」

そこで言いとどまる。

なんとなく、言いたくない、知られたくない…よつな。

「見ていい？」

「うーん…」

「なんで？いいでしょ、見たらいけないもの？」

僕が書いたなんて絶対に言えない。

中元さんはしつこくお願いしてくる。

こういう場合ってどうすればいいんだろう。

「えー…あー…」

「…『悪ノ王子』？」

もたもたしていたら勝手に題を読まれてしまった。

「こ、これはっ…えっと…」

「ああ、映研部の台本？学校中にポスターあるから知ってる。…そういうえば西川君も万屋同好会だったっけ」

「そう、だけど」

あーなんたる何言えはいいのかわからない？

「今、練習中じゃないの？」

「それが、ちよっと台本にミスがあって…」

「どんな？それ、西川君が書いたの？」

なんで中元さんはそんなに当ててくるんだよ。

逃げたい。今すぐ逃げたい。

「私、撮影ってどんなことするのか見てみたいな！。今から行っていい？」

このままじゃ、ダメって言ってもついてくる勢いだ。

僕はなんとかかして、この重大なミスをごまかさないとイケないのに。

「…ん？ごまかす…」

ニヤリと笑う。

「もちろんいいよ。好きなだけどうぞ」

映研部のドアを開ける。

「ただいまー」

「「「茜？どこ行ってたんだよ？」「」」  
3人にせまられても動じない。

「中元さん、入ってもいいよ」

「失礼しまーす。わあ……」

中元さんが入ってくる。

「勝手にいなくなってゴメン。実はね……」

またニヤリとする。うまくいったよ、フッフ……。

「白の王女を捜しに行ってたんだよね」

「……………え？」

中元さんが固まった。

臨機応変に（後書き）

次は秋雨さん！

3 (前書き)

秋雨です！

固まっている中元をみんなが凝視する。  
そういえば女王様いなかったもんなー。

茜、ナイス！

「白の女王……」

「そういえば、いなかったな」

「俺、てつきり誰かが女装するのかと……」

真実の爆弾宣言。

男子が全員固まる。

女装なんて誰もしたくねーもんなー。

「……………衣装係」

高坂部長が口を開く。

「今すぐその女子を着替えさせてくるんだ！」

珍しく必死になって早口で衣装係に言う高坂部長。

衣装係の男子はそんな部長を見てポカーンとしている。

「何をしている、早くしろ！」

「あ、は、はいっ！」

未だに固まっている中元を連れて、衣装室らしき所に行ってしまった。  
た。

「高坂先輩、大丈夫ですか？」

若干顔が青くなった高坂部長を心配して、由輝が声をかける。

「ああ、大丈夫だよ。……ちょっと昔のことを思い出して……」

遠いところを見ながらフフフフと笑い始めた部長。

トラウマってやつだな。

「部長、あの、大丈夫っすか？」

壊れた(?)部長を心配した部員の1人が話しかける。

「え、何がかな？フフフフ……」



部長は中元と衣装係が戻ってくるまでこの状態のままだった。

「……コホン。取り乱してしまつてすまなかつた」

咳払いをして謝る部長。

顔が赤いのは気にしないでおう。

部長の名誉のためだ？

「さて、西川君が連れてきた女子が着替え終わったみたいだ」

中元、着替え終わったのか。

うし、カメラの準備OK。

「入ってきて」

部長が呼ぶが、中元が入つてこない。

「はあ、あきらめが悪いな」

眞実が衣装室に入つていく。

「な、ひ、東山君!？」

「ほら、早く来いよ」

「え、あの……」

眞実に手を引かれて中元が出てくる。

うっしやーっ？

ここぞとばかりにシャッターを押す。

出てきた中元は白いドレスに身を包んでいた。

「んー、なんかパツとしない……」

茜が腕を組んで考え出す。

「これでいいんじゃないの？」

「ダメ。んー……あ、そうか」

手をポンと叩き、中元の肩をポンと叩く。

「髪、決めようか」

爽やかな風が吹き、メガネがキラんと光る。

「えと、あの」

「メイクさーん、よろしくー」

「あ、はい」

ノリノリのメイクさんが中元を連れていく。

茜と部長が笑いあってハイタッチ。

って、何で茜が仕切ってたんだ？

3 (後書き)

次はプー太さん！

ザ・撮影中（前書き）

プー太です！

## ザ・撮影中

茜の人選はちょっとミスったのかもしれない。

「えと、あの…こんな姿で人前に入るなんて無理だつてばあ！」

「中元。時にはあきらめという潔さが必要だ。俺もこんなカツコだしさ、おそろいだと思えば恥じらいはなくなるって！」

髪を染め、化粧もした中元。

なかなかカメラの前に立とうとしない。

やっぱこういう時って俺の出番？

「中元」 ぼんっ

「はいっ！…あ、北村くん？」

「まあまあ 落ちつけよ」

きまつたくな？

「ななな…」

「な、がどうしたんだ？」

「なんだかできる気がしてきた！」

「そっか。がんばれよ、俺は差し入れ調達に行くから」

さつきまで柱の陰から出てこなかった中元が先陣きつて演技を始めた。

なんだかんだ言ってけっこーお似合いじゃね、あの2人。

王子の真実と波長みたいなのがピッタリっぽいし。

「さーてと、行ってきますか」

…そういえば黄色の男役、いなくな？ なんだか嫌な予感がした。

両手に差し入れ（という名のおやつ）を抱え足早に撮影場所に戻る。その瞬間、茜と目が合った。

即行で逸らしてなかったことにしようとしたが、茜には通用しなかった。

ニツコニコしながらこつちに歩いてくる。その手には朝弥も捕えていた。

「由輝、朝弥とジャンケンしなよ」

「由輝いいい！オレはやだ！由輝がやってくれええ！」

「や、やめる朝弥！俺を巻き込むな！俺は差し入れ係で満足してるんだ！」

「や・れ」

「す、すいやせんつしたあ？」

なんだ。なんなんだ茜。俺はお前をそんな風に育てた覚えはないぞ！俺から差し入れの品を強奪すると黒い笑みを浮かべる茜。

視線が怖すぎておすおす手を出した。

「一回勝負だからね。負けたら…わかつてるよね フフツ」

何が、とは言わない。

「い、いくぞ？」

「お、おう…」

「最初はグー、じゃんけんポンツ？」

俺が出したのはチョキ。朝弥は…。

あれから30分。

俺は歡喜に満ちていた。

「クツソおお…なんでパー出したんだオレ」

俺は朝弥に勝ったんだ。

「がんばるがいい朝弥クン」

「けっ！オレ当分由輝と口きかねえもん！」

ブツブツ言っただカメラの前に立つ朝弥。

撮影が始まる。

中元が黄色の男にほれるシーン。

これがなかなか進まない。何度も何度も撮り直す。

…真実つてすげえんだな。一回でOKとかすげえよまじで。

結局OKが出たのは12回は撮った後。

「次は大臣を呼んで国を滅ぼすシーンいっこか」

部長さんの仕事を横取りして監督をしている茜は活き活きしている。

「今日はもう帰らねえと下校時間だぞ？」

「なら明日だね。みんな練習しといてね」

それはもう恐ろしいほどに。

「はぁーつかれた」

「お疲れ様。帰るか」

「おう」

ザ・撮影中（後書き）

次は緋紹さん！



青の女剣士（前書き）

緋紹です！

## 青の女剣士

「ただいまー」

家に入ると出てきた母さんが目を丸くした。

「あ、あんた、その髪…」

「ああ、これ。これは」

パシッと頭を叩かれる。

「イテツ」

「何なのよこの髪は？不良になっちゃったの！？ん！？」

ややヒステリック気味に母さんが叫んだ。俺の両肩を掴んで揺さぶってくるが流石にこの歳になるともうそんなに揺れない。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと落ち着いてよ」  
腕を掴んで落ち着かせようとする。

「落ち着けるわけないでしょ？こんな髪にして、悪いお友達ができたの！？もう、お母さん、お父さんになんて言えばいいのよ？」

「違うって？これは映研部の映画に出るから一時的に染めてるの？風呂に入れば落ちるよ？」

「あらそう…：そうなの…」

世の中は便利になったのねえとしみじみと呟く。  
俺は母さんの手を離して溜め息をつく。

「え？劇？もうそんな時期なの？」

「いや、部の活動」

「ああ…：あら？演劇部にあなた入ってたっけ？」

「違う違う。万屋同好会の」

「ああそういえばそういうのにも入ってたわね」

居間に移動しながらネクタイを解く。額にかかる前髪が赤くて目に入るとギョツとしてしまう。

「ご飯できてるけど」

「んー…」

前髪を摘まんで考える。

「ご飯は、落ち着いて食べたいよな。」

「風呂先に入ってくる」

「はい」

風呂に入って髪を洗うと赤く水が染まった。

ということを食べを食べてから由輝に電話で話すと

『うおっホラーだな』

と笑った。

「何だよ。俺ちよーびびったんだからな。しかもなかなか落ちないし」

『染髪料だからなあ』

苦笑したのが目に浮かぶ。

「明日も染めんだろ？」

『だろうな』

俺は溜め息を吐く。

『そういえばまだやる人が決まってる役あつたよな』

「え、あーそういえば。“青の女剣士”だっけ？」

『そう。どうすんだろうな』

「また茜が見つけてくるんじゃないか？」

『しかもまた事後承諾で？』

由輝が軽く笑ったのが聞こえた。

「そうそう。今日の中元とかすげーびっくりした顔してたもんなあ」  
俺もつられて笑う。

「流石に今度はちゃんと話すんじゃない？」

『だといいいけど。うわ、なんかすげー申し訳なくなってきた。吉野、帰ってきてー？』

「お前のせいだ、お前の。早めにフォロー入れないと、取り返しつ

「なくなるぜ」

『痛いところ突いてくんなー。どうしようもなかっただろ、あれは』

「まあ乙女心はわかんねーし、そつとしいたほうがいいのかねえ。ま、それは後々考えるところぜ」

『おー。じゃあな』

「ああ」

電話を切って布団に寝転がる。

とろとろとした眠気が襲ってきて、俺は目を閉じた。

翌日、放課後そのことを茜に話した。

「で、誰か目星はつけてんの？」

金髪にした髪をうっとおしそうに摘まみながら朝弥が聞いた。

「え？何言ってるの。由輝がやるに決まってるじゃん」

俺と由輝は同時に噴出した。

「は、はあ！？」

由輝が、女剣士！？つーか女装！？

中元も口を開けている。

「そう何人も部以外の人に迷惑かけられないしね。僕は監督があるし。じゃあ残ってるのは部長と由輝だけど、部長は体格と顔的に無理。てことで由輝しかいないじゃん」

真顔で茜が言った。

あれ、真面目！？本気じゃん？

「イエー？」

朝弥が拍手する。

チラリと由輝を見ると片頬を引き攣らせている。

「嫌だ？」

叶うことのない抵抗の叫びが部室に響いた。

青の女剣士（後書き）

次は、夕さん！

え、こねって…(前書き)

夕です！

え、これって…

すかさずメイクさんと衣装係さんが由輝を連れていく。

なんか、投獄される人みたい。

うーん…女役はかわいそうだったかな。

「にしても、ここ異国じゃね？」

「確かにね」

金髪の朝弥がそのガラガラした髪をいじっている。

「真実は赤、中元が白、オレが金！茜もなんかしろよー」

「残念。残ってる主要キャラクターは“青の女剣士”だけでしたー」  
僕がそんなへまするわけないじゃん。

ぜえったいに登場人物はやりたくないからね。

周りを見ると真実はまた台本の世界の住人だった。

中元さんも一緒か。

隣に並ぶと、かなりの迫力。

と、そんなこんなうちに、“青の女剣士”が完成したらしい。

「由輝ー、出てこいよー？」

ノリノリの朝弥が由輝を呼ぶ。

…でも、出てくる気配なし。

まず部屋から出てきたのはメイクさんと衣装さん。

「なんか…疲れてるね？」

「俺、メイクであんなに汗かくとは知らなかった…」

中元さんと真実の言うとおり、2人ともゼエゼエ言ってる。

「部長？俺達、あんなに抵抗する人初めてっスよ？」

2人は同時に由輝の差し入れジュースに突進してた。

うん、なんだか期待できそうだね。

「朝弥、由輝捕まえてきて」

「かしこまりましたあつ」

ジャンケン負けといてよかったー？とか叫びながら、部屋に入っ  
ていった。

「ぎゃあああああつ？」

その直後、人2人分の絶叫が聞こえた。

「……………」

今度は沈黙。

「お前誰だあ？」

「北村 由輝ですけど！？文句あるか！？」

「ないないない？だからこっちくんな？」

「なんでだよ？」

「カンペキ過ぎて怖いからっ」

…なるほど。

声だけでもなんとなくわかる、どうなってんのか。

「あつさみー、早くつれてきてー」

ドアが音を立てて開いた。

涙目の朝弥が引っ張って出てきたのは。

みんな顔が引き攣る。

「わ、私より女…かも」

「朝弥の気持ち…わかる、な」

「だろ？」

ロングの青髪、化粧もされた由輝は…なんというか完全に“女”だ  
った。

僕も目を疑った。

「もう…どうとでもしてくれよ…」

だって、目の前に立ってるのは…

由輝がふらふらと僕のほうへ来る。

だって、だってこれはどう見ても…

「姉さん！？」

「はあ？」



「ちよつ、こつち来ないでよ？」

由輝の目がキラんとあやしく光った。

「茜、姉さんが見に来てあげたわよ」

「嫌だあああっ？」

え、これって…(後書き)

次は秋雨さん!

3 (前書き)

秋雨です！

茜が必死に由輝から逃げる、というおかしな光景。珍しいから撮っておこう。

先回りして写真を撮る。

いつも写真を撮ると怒る茜も、今日は怒らない。

こっちに気付いてないからだけだな。

「真実、いい写真撮れたぞ！」

「マジ？見せて」

さっき撮ったばかりの写真を見せる。

茜が軽く涙目になりながら由輝から逃げ、由輝は楽しそうに追いかけていた。

「ぶはっ、何だこれ！」

写真を見た真実が噴き出す。

「こんな茜、滅多に見れないからお宝写真だぜ！」

茜の写真もあんまりないけどな。

「あ、そうだ。由輝ーっ」

何か思いついたららしい真実が由輝を呼ぶ。

「呼んだか？」

茜を追いかけるのをやめて、由輝がこっちに来た。

「呼んだ呼んだ。あんな、……………」

真実が由輝に耳打ちする。

「おっ、それいーな！」

「だろ！？」

「オレにも教える！」

我慢できなくなり、真実にタックルした。

「どぶうっ！何すんだ！」

もちろん怒られる。

「オレに教えない真実が悪い！」

「はあ？つたく……。あんな、茜の弱点って姉さんっぽいだろ？で、その姉さんに由輝が似てる。それを利用して茜に何か役をさせるってわけ。わかったか？」

「おう！いいな、それ！」

すっげー楽しそうだし！

「……ということだ」「……」

くるっと思のほうを向く。

「何？」

由輝が追いかけるのをやめたせいか、いつもの茜に戻っていた。

「由輝、レッツゴー！」

「おうよ」

少し咳払いをする。

「あーあー、よし。茜」

「だから何？」

由輝の声はいつもより高い。

それに比べて茜の声は低い。

すっごく不機嫌だな。

「何かの役をしなさい」

にっこり笑って言い放つ由輝。

「嫌だ」

茜もにっこり笑っている。

「茜。や・り・な・さ・い」

「い・や・だ」

茜はやっぱり拒否する。

しびてー。

「こつなつたら最後の手段だ。由輝、よろしく」

「まかせろ！」

由輝が泣きまねを始める。

「茜……………、姉さんの言うことが聞けないの……………？」

「ぐっ……」

何も言えなくなったのか、茜は黙った。

「うっっ」

「ああ、もう、わかったよ！やればいいんでしょ！」

うっし、茜がOKしてくれた！

何の役になるのかな！。

3 (後書き)

次はプー太さん！

メイキング(前書き)

プー太です！



## メイキング

「あ、か、ねーいつまで姉さんを待たせる気なのー」

「声を変えるな、声を」

「ぺしつと頭を叩かれる。」

「いいっスね いいっスね！もう最高っスよ！」

「部長！これは大ヒット間違いないですよ！」

衣装さんとメイクさんの鼻息が荒い。

「茜！早くしなさいよ！」

「…もう知らない」

怒鳴ると出てきた茜。どうやら腹をくくったようだ。

「…おお…」「」

変身した茜の髪は深い緑。なんかカラコンも入ってる。それに服は2次元並に豪華だ。

「チョーかっけえ。腰にさした剣なんかめっちゃカッコイイ？」

「かっこいいじゃないのよ！」

「悪ノリしすぎだぞ由輝」

また頭を叩かれた。

ちえと不貞腐れてみる。今思えばこの格好も悪くない。

「じゃあセリフ合わせてみて撮るの再開するとしますか」

「…」「はい」「」

映画を撮り始めて思ったのは、俺も演技はやればできるんじゃないかな？的な自意識過剰な考え。

「はいストップ！そこはもっと張り詰めた感じで！」

…あれ？

「だーかーらー！そこはこうしてくれないかな？うん」

あれ？

「カットカットカットおおおお！そこはもっとこうオーラを出してほしいんだよ！殺気とかそういうのが欲しいんだ！」

…俺、演技向いてないのかな？

「笑うな朝弥」

「ププツ 高坂部長にここまで言わせるてすっげえよ いろんな意味で プツ」

「棒読み」

「大根役者」

「無表情」

馬鹿笑いする朝弥は、必死に笑いをこらえる真実に、疲れ切った顔の茜。

思ったことをズバズパ言いやがって…。

「みんなは俺を泣かしたいのか？」

「…うん」「…」

…もう嫌だ。早く帰りたい。

「再開するから配置に付いてー」

「姉さ…由輝、行かないの？」

「俺、くじけそう。ここまでできないとは思わなかった…」

茜も剣士役で、俺より上手いしさ。女剣士代わってくれたら楽なのに。

「何その目。僕はこれ以上の役はしないからね。そんな顔されたって…」

「姉さんを助けようとは思わないの？」

「？う…あ、撮影始まつちゃう！」

ちえ、逃げられた。

重い重い腰を上げてカメラの前に立つ。

今撮ってるのは王子を追い詰めて捕えるところ。

目を閉じて大きくゆっくりと深呼吸する。

…よし。

「スタート！」

役に入り込んで王子になってる真実に剣を向ける。俺も本気でしないな。

俺は怒りに満ちた女剣士。

コイツが憎い。コイツを倒すんだ。倒さないといけないんだ。自分に暗示をかける。これ以上俺が皆の足を引っ張ったら駄目なんだ。

「はいオーケー！今日のところはこれで終了！明日でラストまで撮ろうか」

それからあつという間に時間が過ぎた。

「さっきのゾツとした！本気で殺されるかと思った」

「うわぁーなんであんなシャッターチャンス逃したんだろオレ！くっそぉ……」

「もう二度とこんなしたくないな俺は……」

汗かくし、上手く演技できないし、女装だし。

「人生の内に一回はいいんじゃないかねーの、こついの。俺はそう思うけど？」

「そうだけど…物は考えようだよね」

それはそうだな。

メイキング(後書き)

次は緋紹さん！

任務完了！（前書き）

緋紹です！

任務完了！

撮影が終わり茜が眼鏡をかけた後、編集係が即行で持って行った。

「うつつし終わったぁー」

由輝が伸びをする。

「じゃあ俺着替えてくるから」

「ちよつと待って」

「え？」

ニヤリと笑う。

「皆の衆集合？」

「何ー？」

「どうしたの」

朝弥と茜が寄ってくる。

顔を寄せ合わせた。

「我らにはまだ1つ、重要な任務が残されているな？」

「重要な任務って？」

由輝がのんびりした声で聞いてくる。

「お前だけは忘れちゃ駄目だろ」

ジト目で由輝を見ると半分顔を引き攣らせた。

「え？」

「ああ？」

茜が声を出した。

「あれね？」

「そう、あ・れ？」

ウインクしてみせてから高坂部長のほうに体を向ける。

「部長ー上映っていつですかー？お願いがあるんですけどー」

当日。

控え室の隅がどんより曇っている。

「由輝…いい加減にしろよ…」

「お前はいいよな？男だから？俺女装だぞ？」

角のほうでしゃがみこんでいる由輝が涙目で俺を睨みあげた。

「俺髪赤いんだぞ」

「俺は青いよ？」

「…ま、まあ」

「行くよー真実、由輝」

茜が入ってきて言った。

朝弥がしきりに髪を気にしている。

上映は全校生徒の前で行われる。

その後出演者全員から挨拶があった。

『3・2・1…』

音楽が流れ始めパツと組んである足が映った。どんどん上にあがっていった俺の顔が映った。

生徒が一瞬固まる。

『さあ、跪け！』

セリフが一言あってからテロップが流れる。「昔々、あるところに

”とナレーションが入る。

それから白の王女 中元が出ると歓声があがり、黄色の国が焼き

払われ王子 朝弥が死ぬと沈黙し、青の女剣士 由輝が出ると

ざわついた。誰だ？と声があがる。

隣を見ると由輝は蒼褪めていた。

「ほらしっかり。あとちょっとだから」

それにしてもすごい。クオリティの高さには舌を巻く。

体育館が明るくなって拍手が鳴った。

『それでは出演者の皆さんに』

舞台上に吉野があがってくる。由輝は口を開けていた。

それにしても、吉野が由輝を好きっていうのも意外だよなあ。

逆ならわかるけど。

「なっやっぱり吉野綺麗だよな」

小声で朝弥に話しかけると頷いてから唇を噛み締めた。

「凜としてるよな。カメラ持ってくればよかった」

ぶつちやけ由輝以外は皆吉野が来るのを知っていた。

そろそろ学校に来いと部長に催促させ、華を添えるために出てくれと茜に説かせたのだ。

吉野を前に進ませないとな。

これぞ重要な任務。

ちなみに由輝は女だと吉野は思っている。気付いていないのだ。どうにかなんとかなるといいんだけど。

あとは由輝次第だな。

上映会が終わり控室に行く途中に吉野が由輝に話しかけていた。

エンディングで出演者の名前を流していないからだ。

ただし、舞台にあがった時に、部長が万屋同好会に協力してもらったと宣伝してくれたので、また我が同好会は有名になった。

由輝は困惑した顔で俺を見たが俺は素知らぬふりをした。

「仲、戻るといいね」

中元がいつの間にか隣に立って言った。顔を見ると目が合って笑いあう。

「な」

「綺麗ですねーお名前なんていうんですか？」

ニコニコと魅力的な笑みを浮かべながら由輝に話しかけている。

中元の腕を掴んで影に隠れた。

「え、えと……」

「？」

「き……北村 由輝……で、す……」

「……え？」

「北村 由輝……」

一瞬の沈黙。



「やだ？本能？嘘？女の子だと思ってた？」

「やめてくれー今泣きたいの？」

「やだ、もう、ホントやだ？」

吉野が嘔き出す。

そして2人で話して笑っていた。

よし、任務完了？

俺と中元はこっそり成功に笑いあった。

任務完了！（後書き）

次は夕さん！

終わり、そして始まり（前書き）

夕です！

## 終わり、そして始まり

僕は1人家に向かって歩いていった。

映研部の依頼が終わって早3日。

同好会がないと僕はすることないから、さっさと帰れるんだよね。

「…かえったら姉さんいるかな」

「へえ、西川って姉さんいるの」

「うおいつ」

いきなり耳元で声がした。

「あはは、ヘンな声」

いつからいたのか、僕の後ろに立っていたのはあの吉野さん。

吉野さんはあの日から学校に来るようになって、由輝も安心してた。

「…なんか、用？」

「うん、よく考えたら西川にお礼言っていないかなーって」

「お礼？僕、なんかしたっけ」

はやく帰りたいなーとか考えながら適当な受け答えをする。

なんで僕は1人のときに女子と会っちゃうんだろ…面倒くさい。

「私の家まで来て、学校につれてってくれたでしょ」

「……」

あれは映研部と由輝のためなわけで、僕がお礼言われるようなことじゃ…。

「西川のおかげで北村君とも元通りだし？とにかく、ありがとう？」

「え…あ、」

吉野さんは突然走りだして、ひとつめのかどを曲がると見えなくなっってしまった。

なんか…なんで？

え、ええええええっ？うん、緊張しただけだよ、うん、うん？

それにしても、女子にそんなこと言われたの初めてかもしれない…。

「うあー…なんだろ…僕なんて言えばよかったんだろ…」

吉野さんが曲がったところにあつたカーブミラーをなにげなく見ると自分でひいてしまった。

「なんで…はあ」

顔が赤かったのは、たぶん夕日のせい？そう思うことにして。

「姉さんにアイスでも帰っていきっかな」

次の日、朝弥と同好会の部室にいた時のこと。

まあ、なんでここにいるかというところ…他のどこよりも落ち着くからかなあ。

カタンとドアが小さく音を立てた。

「あれ？カマさんかな」

「いや、カマさんならもつとでかい音で入ってくるはず」

朝弥が棒付きアメを一気に噛み砕いてドアを開ける。

「いたずらなら堂々と来いやあつ？」

「きゃっ」

「ああん？」

朝弥でよく見えないから、僕もそっちへ行ってみよう…する前に朝弥からお呼びがかかった。

「あ、茜ー？」

「なに」

「泣かせちゃまった…あははー」

「はあ？」

ドアの向こうに立っていたのは、かなり身長の高い女子生徒。とにかく中に入れる。

イスを出してあげて、そこに座らせると朝弥がわたわたり始めた。

「ご、ごめんな？つい、いたずらかと…悪気はないから、絶対？」

「はい、わかってます…え、と…びっくりしちゃっただけで…」

「よかつたあーっ」

イスにどっかり座る朝弥を見て、その子は笑った。

「で、用があつてきたんでしょ」

急に顔を赤くして俯く。

「あ、あの…実は…」

「なんでも言つてみる？オレらは万屋同好会だからな？」  
そんな朝弥にもう一度ふわっと笑つた。

「写真…写真を撮ってもらいたくて…き、来てみたんです」

終わり、そして始まり（後書き）

次は秋雨さん！

3 (前書き)

秋雨さん!



写真だつて!?

「写真ならオレに任せろっ!」

カメラを持つ。

「はいはい、落ち着いて。えーっと、名前を聞いてもいいかな」

「あ、はい。えと…小森こもり 飛鳥あすか、です」

「小森さん、だね。依頼内容をくわしく聞いてもいいかな」

「はい。あの、私、モデルのお仕事をしていて……その、写真を

……撮って、もらいたくて……」

しゃべってるうちに小森は俯いてしまい、声も小さくなった。

「だあーっ、焦れたい! もっと八キ八キと話せっ!」

ビシッと小森を指さして言う。

「……あうう、ごめ、なさい……です」

そういう小森の目にはうつすらと涙が。

「あー、朝弥が小森さん泣かしたー」

それを見た茜が茶化す。

「いや、怒ったんじゃない、あの、うーん、もっとはっきりと話

してくれたらなーって」

「ご、ごめんなさ……」

「あーあ、どうすんのさ、朝弥」

「オレのせいじゃねーし!」

「いや、朝弥のせいだね」

オレにどうしろってんだよ!

「あ、そーだ。僕、真実と由輝呼んでくるから」

じゃーねーと手を振りながら茜は去って行った。

茜ええええええええ?

残されたオレは小森と向き合う形で沈黙する。

「あの、南沢君……………」

「なに？」

「えと、その……………さっきは、ごめんなさい……………」  
「さっき？オレ、何かされたか？」

「いきなり、泣いたりして……………」

あー、あれか。

「いや、オレも悪かったし。いきなり怒鳴ったりして」  
また沈黙。

「……………ふふっ」

急に小森が笑った。

オレ、何かした！？

「あ、ごめんなさい。つい……………」

なんだあ。オレが何かしたわけじゃないのか。

なかなか返事をしないオレを見て、小森はおろおろし始めた。

……………何かに似てる気がする。

あ、あれだ。

「なあ、小森」

「は、はい」

小森の肩がビクツとはねる。

やっぱり似てる。

「小森ってさ、小動物みたいだなっ」

「へっ？」

「コロコロしててさ。うん、やっぱりそっくり」

一人でうんうんと頷く。

「……………あの、南沢君」

「んあい？」

「えと……………飛鳥って、呼んでください……………」  
「真っ赤になって俯く小森。」

「……………はい？」

「あの、ですから……………その……………名前、で……………」

声が小さくなってうまく聞こえなかったけど、名前で呼んでくれてことらしい。

「わかった。飛鳥、だなっ」

にか、と笑う。

「オレも名前で呼んでくれ！南沢って言いにくいだろ？」

「……………うん」

声は小さかったけど、小森はしっかりと頷いた。

「ただいまー。真実と由輝つれてきたよー」

真実と由輝をひきつれて、茜が帰ってきた。

3 (後書き)

次はプー太さん！

春到来？（前書き）

プー太です！

## 春到来？

また今日も部活中に連行されて俺は袴のまま部屋へ。

部屋にいたのは朝弥と可愛らしい感じの女子生徒。

俺らが入った途端、女の子は朝弥の影に隠れた。

「この人が今回の依頼主の飛鳥。写真撮ってほしいんだってさー」

「えと…小森…です」

あー…なんか苦手なタイプかも。

朝弥にはなついてるみたいだけど少し絡みにくい感じ。

「写真ならさ、朝弥がやりたいんじゃないのか？」

「あつたりまえじゃん！」

「俺ら来た意味は？」

「あるよ。いてくれないと僕が嫌だ」

よっぽど女が嫌いなんだろうつか茜は。

「小森さんさぁ撮りたい写真ってどんなやつなの？」

「…朝弥くん、ちよつと…言いづらい…」

うん、やっぱり言葉のキャッチボールができないとなんともなあ…。

「飛鳥ってモデルなんだってよ！んで、その写真を撮ってほしいって」

しょぼんとしてしまった小森さんに飴をやってはげます朝弥。

あらら、このかんじって…。

「真実」

「俺も思った」

カレカノっぽくないですか？

飴を受け取った小森さんは顔をほころばせ、ふわりと笑った。

小森の頭をわしゃわしゃなでまわす朝弥も朝弥だ。

激しく俺たち居ずらいんですけど。

「僕はもうギブアップ…花が飛んで見えるんだ。目がいかれたのかも」

この短時間で疲れ切った顔をして出て行くこととする茜の肩を掴む。

「任務を遂行するんだ茜。我慢だ、耐える」

「由輝なんかやばい！2人だけの世界に入ってるぞあれは？」

「……帰りたい」

やけにハイテンションな真実に、「帰りたい」をひたすら連呼する茜。

ここはやっぱり俺の出番なのか？

よし、ここで俺が部長としてガツンとだな……。

「朝ッ……」

「朝弥くん……カメラ好き、なんだね……」

「おう！カメラの次に飴が好きなんだ」

「……ふふっ……そうなんだ……」

帰ろう。俺には無理だ。

もっと思っておこうとこねる真実を引っ張ってそれぞれの部活に戻った。

次の日の休み時間、朝弥はチャイムが鳴った途端教室から姿を消した。

それから始業ぎりぎりに帰ってきて、それを何度も繰り返した。

トイレなのか……？

とも思っただけど違うみたいだ。

奇怪な行動に疑問が浮かんで消える。

結局その答えがわかったのは昼休みだった。

「飛鳥も一緒にメシ食っていいよな？」

朝弥が小森さんを連れて来た。

「遠慮せずに座れっつて！」

「……でも……」

想定外だ。

別に嫌とかそんなんじゃないけどさ、ちょっと気まずいじゃん。

「じゃあいつただきまーす！」

「いただきます」

「……。いただきます」

「えと…突然お邪魔してごめんなさいっ！」

「……いえいえ」「」

これは朝弥が悪いとそういうやつじゃないから表しづらいけど、  
つぱは仲よさげに話す2人の前でご飯は食べにくかった。



春到来？（後書き）

次は緋紹さん

疑問（前書き）

緋紹です！

## 疑問

部室に入ると朝弥と小森ちゃんが何か話し合っていた。

「よお。2人共、早いな」

「ああ、今どこで撮るか決めてたところ」

「ど…どうも」

「はいどーもー」

ソファにかばんを置いて朝弥の隣に座る。テーブルの上に置いてある多分小森ちゃんのだと思われる可愛いメモ紙が目があった。持ち上げてそれに目を通す。

“中庭、公園”

「この2つだけ？」

一緒に中に入った茜が横から覗き込んできて言った。

「あと1つぐらい決めたいんだけどなー」

朝弥がソファの背もたれにもたれかかって上を向きながら言った。

「どっかの部屋は？」

由輝が心なしに小森ちゃんから離れて言った。座っている俺の後ろに立って逃げるように目を逸らしている。

こら由輝。お前何してんだ。

「屋外ばっかじゃん」

「あー確かに。誰かの家使えない？」

朝弥が皆を見渡しながら言うつと全員が目を伏せた。

嫌に決まってる。

家に女子を呼んだりしたら母さんがなんて言うかわからない。

由輝達がいっても話は別だ。

『4人で奪い合ってるの？頑張り真実？押して押して押しまくるのよ？』ぐらい言いかねない。

あの人、なんで息子が女子といたら常にその子を狙ってると思ってるんだろう。おかしいだろ。俺がいつも欲情してるみたいじゃねえ

か？

「俺、無理」

「俺も無理」

「僕もやだ」

茜がやけに切羽詰まったように返した。朝弥がこれまたコミカルな動きで机についていた肘をガクツと落として茜を見た。

「やだつて。茜、なんでだよ」

「いつだと思ってるの。どうせ土日でしょ！？姉さんがいるじゃんか？そんなところに小森さん連れてってみなよ？」

ブルリと体を震わせ顔を蒼褪めさせるとフツと達観したように眼を細めた。

「…一体どんな反応をされるか…」

「ああ…」

朝弥も遠い目をする。

いや、マジで一回茜のお姉さん、会ってみたいわ。

「朝弥ん家は？」

「俺ん家もなあ…騒がしいから」

朝弥が小森ちゃんに向いた。

「飛鳥のとは？」

「……わ、私の…部屋で…よければ…」

小さい声で小森ちゃんが答える。隣にいる朝弥にちょうど聞こえるぐらいの音量だ。

そっぴや、小森ちゃんって、こんなに人見知りなのにモデルなんだよなあ。しかもプロで、雑誌にも載ってるんだよな。

「OK、じゃあ、そこで。お前らも来いよ」

「なんで!？」

由輝が素っ頓狂な声をあげた。由輝も、その隣の茜の顔にも悲壮感が漂っている。

「反射板持ってもらったりしなきゃいけないし、人手がいるんだよ」

「す…すみません…」

小森ちゃんがオドオドと頭を下げた。

こんなに、人見知りなのに、なんでモデル？

「小森ちゃんさあ、なんでモデルになるうと思っただけ？」

「え？」

俺の言葉に小森ちゃんが顔を上げる。キョトンとした顔だ。

「こつ言っちゃ悪いけど、小森ちゃん人前に出て目立ちたがりや性格じゃないだろ？モデルになって何がしたいんだよ」

「真実」

由輝が窘めるように俺の肩を掴んだ。

「まあまあ。いいじゃん。知りたいだけ、知りたいだけ」

「でもなあ」

「い、いいんです」

小森ちゃんが珍しくいつもより大きな声で俺と由輝の会話を遮る。

俺は小森ちゃんに目をやった。

小森ちゃんの何かに立ち向かうような目と鉢合っ。

あれ、思ったより強い子だった？

楽しんでるような思わず小さく笑ってしまうような、そんな気持ちになった。

「か…変えたくて…」

「え？」

「今もだけど…私、少し前までは、ほんとに…ほんとに、誰とも、話せなくて…。このままじゃ、駄目だって…思っただけ…」

「……………」

「変わりたくて…それで…応募したら…仕事、もらえて…。モデルは、楽しい。けど…全然、話せるようになれなくて…モデル仲間も、少なくて…」

どうやら思ったよりポジティブな子だったらしい。

「いいじゃん？」

朝弥の言葉に俯いてしまっていた小森ちゃんが顔をあげた。

「話せるようになってるって？な？」

朝弥が俺達に同意を求めて振り向く。

俺、朝弥のそういごと、「いいなって思っぜ。思わず笑う。」

「うん。今の聞いてスッキリした？俺もそう思うよ」

「俺もー」

「僕も、少しは進めてると思うよ」

由輝と茜も頷く。

「変われてるよ？飛鳥、頑張ってるって？」

朝弥が小森ちゃんの頭をグシャグシャと撫で回した。

「ありがとう…」

小森ちゃんがふわりと笑った。

疑問（後書き）

な、なんか真実が黒い……。意地悪、それは茜のポジションなの？

次は夕さん！

帰りたい(前書き)

夕です!



## 帰りたい

次の土曜日、先生に頼みこんで中庭に入れてもらった。

「ん、飛鳥。どっかに立ちな」

「…じゃ、あ…」

小森さんがとてとてでつかい木の下に行って立つ。

「そんじゃ、撮るぞー。笑えよー」

「は、はい…」

朝弥がカメラマンだから、僕達は必然的に裏方さんなわけで。反射板を持って朝弥の後ろに立つ。

「ねえ、僕達つてずっとこれだよね」

「だろーなあー」

「楽しそうな朝弥が憎い」

パシャパシャとシャッターを連打している朝弥はたぶんカメラマンになりきってんだろなー。

小森さんはシャッターを押される度に違うポーズで笑ってる。

なんか：やつぱり2人の間に花が飛んで見えるような…。

「僕、抜けていいかな」

「「逃げんな」」

眞実と由輝にがっしり腕を掴まれる。

「よし、中庭はこれくらいでいんじゃないかね？」

「ありがとうございます…」

「次行くか？おーい、3人共行くぞー」

あー、朝弥のくせに…小森さんと2人でさっさと行くんじゃない？荷物くらい運んでよ。

「今からでも抜け出せると思うんだよね」

反射板を3人で運びながらぼつり。

「茜ー、俺だつて逃げたいんだから」

「なんでだよ、あの2人おもしろいじゃん」

由輝と僕はさつさと消えたいのに、真実が帰らしてくれない。

と、公園への角を曲がった時、由輝に誰かがぶつかった。

「きゃっ……」

ぶつかったのはやっぱり平方さん。

ほんと、これだけぶつかるのも奇跡だと思うんだ。

「平方さん、まだ由輝のストーカーしてんの？」

「ストーカーじゃないっただら？あたしはたまたまここを歩いてただけ？」

「ふーん……じゃっ」

興味なさそうに由輝が歩きだそうとしたのを平方さんが止める。

「あんた達は何してるの？そんな板持って」

「依頼」

「へえ、どんな？」

「それは言えませーん」

この2人って、なんだかんだ言っても仲いいよね。

「ならいいわ、あたしもついてくから。ちょうど舞もいるし」

「まい？」

「そう、中元 舞」

「あー中元もいるの」

真実のテンションがあがる。……なぜ？

「いいじゃん由輝、みんなで行けば。小森ちゃんの話し相手にもなるしさー」

僕としては小森さんだけで十分だけどなあ。

で、結局平方さんも一緒に公園に向かった。

公園にはもう朝弥と小森さんがいて、なんか話してる。

「あ、中元さん」

その隣には中元さんがいる。

「おっせーぞー？」

「ごめん、そこで平方に会って」

「ふーん、ま、いいや。飛鳥ー撮影すつか？」

「あ……うん……」

周りを見るとかなりの大人数になっていた。

しかも……女子×3・

逃げたいなあ……。

帰りたい(後書き)

次は秋雨さん1

3 (前書き)

秋雨です！

平方と中元が加わって、撮影は騒がしくなった。

「にぎやかですね」

「え、うるさい？」

「いえつ、…えつと、その……、楽しいな……って……」

顔を真っ赤にしてうつむく飛鳥。

楽しいならいつか？

そして時間は過ぎていく。

「撮影終わったーっ！」

「やつと帰れる……」

やけにうれしそうな由輝と茜。

「何言ってるんだ？これから飛鳥ん家行くんだから帰れるわけねーじゃん」

そう言ったら、2人はすっげー衝撃的な顔をした。

「そんな……」

「まだ帰れないなんて……」

「楽しいんだから帰らなくていいでしょ。ねー、舞」

平方は中元に同意を求めた。

が、中元は真実と話をしている、まったく聞いていなかった。

「とつ、とにかくっ！」

平方の顔がほんのり赤い。

恥ずかしかったんだな。

「小森さんの家に行くんでしょ！？ねー、舞っ」

しかし、やつぱり中元は真実と話している気付かない。

もうかわいそうだよ。

「……………行くか」

由輝が平方の肩をポンと叩いた。

平方は遠い目をしてコクンとうなづく。

「行くんなら早く行くよ。はあ、帰りたい……」

「じゃあ行くか！飛鳥、案内よろしくなっ」

「あ、はい……」

自分達の世界に入り込んでいる真実と中元を呼んで飛鳥ん家に向かった。

その途中で吉野と出会い、なんやかんやで巻き込んだ。

話しながら歩くと、時間がたつのは早く、あっという間に着いた。

飛鳥の母さんが出迎えてくれた。

「あらあら、飛鳥のお友達？まー、大勢ねー」

「「「おじゃましまーす？」「」「」

「はい、いらっしやい」

飛鳥の母さんはにこにこしながら飛鳥の部屋に案内してくれた。

本人いるけどな。

「ゆっくりして行ってね」

扉の前で手を振りながら去って行った。

「えと………、…どうぞ」

飛鳥が扉を開く。

仲はピンクを中心とした女の子っぽい感じの部屋だった。

ベッドの上にはクマのぬいぐるみが置いてあった。

「おー、ひねー」

「す……」

「そうか？普通じゃん」

「普通じゃないだろ」

男子の反応はそれぞれ。

女子の反応は

「「かわいい部屋だね」

「きれいに片付いてる……」

だった。

3 (後書き)

次はプー太さん！



見学兼お仕事ということで（前書き）

プー太です！

## 見学兼お仕事ということで

あれからザワザワ(?)しているとお森の母さんがお菓子を出してくれて、なんやかんやでまったり過ごす。

今いうのもアレだけどさ…密度高くね？

「ねえ」

「何?…って平か…ストーカーか」

「なんでそこ言いなおすのよ!普通に平方って言いなさいよ!あたしはストーカーじゃないわ!」

「はいはい、顔、近い」

「う、うう…うるさい!」

「あ…!俺のクッキーがあああ…」

「僕の分あげるから黙って」

あからさまにゲッソリしてる茜。

クッキーをもらったけど何か悪い気がして返しておいた。

「どうしたのよ西川くん。ム〇クみたいになってるじゃない」

「ハハツ。…気にするんじゃない。知らなくてもいいことはこの世に五万とあるんだ」

「…帰りたい」

「よーし!始めっか」

「チッ」

なんどろう、怖い。

この2人、変なところでつながっててなんか怖いぞ。

「由輝か真実、反射板持ってスタンバって」

「反射板?そんなもの何に使うのよ」

「説明しろってー?面倒だから見とけばー」

由輝と真実って言ったけど真実は中元と話し込んでいて気付かない。てことで必然的に俺が持つことになった。

「こんなかんじでいい?」

「オーケー、動くなよー？でも飛鳥…お前は動くんだぞ」

「…うえ！？…う、うん…でも…」

「大丈夫だって。飛鳥はできる。オレが保証すつから」

「う、うん…」

この2人、何かのドラマでもやってんのか？

聞いているこつちが恥ずかしいつーの。

それから何回かシャッター音が聞こえた後、朝弥が唸った。

「何か足りねえ…」

「……！わ、私の…、せいだよね…ごめん…」

「そうじゃなくてなあ…うーん…飛鳥、なんか好きなモンとかある？」

「…えつと」

流石に腕が痛くなって反射板を下ろす。

視界に入ったのはぼっけーと眺めてる平方と、部屋の端でブツブツ言ってる茜（末期症状か？）と、話に夢中になっている真実と中元と、心、ここに在らずの吉野と…

吉野に抱き締められているテディベア。

ほほお〜テディベアねえ〜

「テディベア持って撮ってみれば？」

「…あ、好きです…」

「は？」

「…いや！その、北村くん…じゃなくて…テディベア、です…」  
今一瞬、時間止まらなかったか？

いやあ…ビビった。

「…吉野さん…借りても…」

「いいよ。どーぞ」

「じゃー再開すつか」

慌ててスタンバる。

またシャッター音が響く。

今度は朝弥の唸り声は聞こえなかった。

見学兼お仕事ということで（後書き）

次は緋紹さん！

2人組だったの！？ しかも相手男かよ！（前書き）

緋紹です！

2人組だったの!? しかも相手男かよ!

「はあ!?!」

朝弥の素っ頓狂な声が部室に響く。

その声のでかさに俺は漫画から目を挙げて朝弥とその隣の小森ちゃんに目を向けた。

「早く言えよ?」

「す…すみません…」

「何?どうしたわけ」

俺の右隣に座っている茜に聞くとこっさり耳打ちしてきた。

「撮影する時、いつも1人で映るんじゃないんだって」

「へ?」

「つまり、男と」

「ああーそついう事」

「嫉妬?」

俺の左隣に座っている由輝が体を寄せ小声で聞いてくる。

由輝が目を朝弥達に向けたまま首を横に振った。

「どうも違うらしい」

「それならもつと男相手の撮影練習したのに?」

「う…うん…」

「よし」

俯いている小森ちゃんが顔をあげた。

「これから男相手に撮る?おい、茜」

茜の顔を見て朝弥が止まる。ヒツと悲鳴を上げて顔を青ざめた。

「…はやめて、由輝」

由輝の顔を見て朝弥が止まる。だらだらと汗を流して目を逸らした。

「…はやめて真実?頼むな?」

「は?いいやいいけど」

何故か他の女子3人は同じように撮影の手伝いをしてくれるようになった。

部活は？と中元に聞いたら黙って肩を竦めていた。

「撮るぞー」

最初は小森ちゃん1人で撮影するらしい。その途中から俺が入る。

「真実、入って」

「はい」

制服のままカメラの前に立つ。

「よ、よろしくお願いします」

小森ちゃんが頭を下げた。

俺も片手をあげて返事を返す。

「よろしくー」

さつきまではなめらかな動きだったけどなんか俺が入ったらギクシヤクしたな。

「……」

小森ちゃんのさつきの動きを思い出す。

「小森ちゃん、見て見て」

「え……」

クネクネと体を動かす。

ぽかんと見ていたがややあつてから嘔き出した。

苦しそうに笑っている。まあ当然だろう。女性用の動きを俺がしているわけだし。

「何それ…っ、へ、変…っ」

「あっヒデー。俺小森ちゃんの真似しただけなのに」

「全然違…っ」

よし、柔らかくなった。

朝弥に目配せするとぐっと親指を立ててきた。

俺も親指を立てて返す。ニヤリと笑顔も忘れずに。

それから話したり遊ぶようにして写るようになった。

その間、中元の視線が鋭いように思ったのは気のせいだろうか。



2人組だったの！？ しかも相手男かよ！（後書き）

次は夕さん！

記念に一枚(前書き)

夕です!

## 記念に一枚

「ねえ、今度は朝弥と小森さんで撮ってみれば？」

あの後結局、僕と由輝も参加させられた。

「オレはカメラがあるし」

「残ってるのは朝弥だけじゃん」

「いや、カメラ…」

にっこり笑って肩に手を置く。

「シャッターぐらい僕も知ってるから。ね？」

「わっかりましたー？」

すぐに小森さんのところへ走っていった。

「飛鳥もアメ食う？」

「え…なんで今？」

「腹減ったから」

うん、やっぱり仲いいね。おもしろいから撮るところ。

シャッターをきると朝弥が棒付きアメをポロつと落とした。

「撮った？」

「撮ったけど？」

今撮った写真を見てみると…なんか、2匹の猫みたいだった。

「これ現像しておいでよ。部屋にかざってあげるから」

「やだっ？せめて真実と由輝のも？な、飛鳥」

「う、うん…」

それは2人も撮るってことかな？

「真実と中元さん、ちょっといい？由輝と平方さんも来て」

「何ー？」

「2人で写真いかが？記念に」

真実・中元さん組はすんなりOKしてくれた。

なんで疑問を持たない？ってかんじだけど。

由輝・平方さん組も嫌がってたけど最後には撮ってくれた。

「朝弥、これ明日までに……」

あれ？なんか……みんなの視線が……

「茜は？」

朝弥がカメラを奪い返しに来た。

「茜も吉野と1枚」

「1人だけ逃げられると思うなよ？」

由輝に肩をガシツと掴まれる。

「……僕はいいけど。吉野さんが嫌だと思うから……」

よし、断れ、断ってくれ？

「私は別にいいんだけど」

「なんで!？」

みんなにカメラの前に引っぱっていかれた。

いいつて言っちゃったから、どうしようもできない。

2人でただ並んでたら朝弥がシャッターをきった。

次の日、朝弥が写真を持ってきた。

小森さんの練習写真と2人ずつの写真。

「うわぁ……本当に持ってきた」

「いい出来だろ？」

僕があらぬ方を見ているのをのぞいたらね。

「依頼の記念にはつとこうぜ？」

それを朝弥が壁にはって。

「えっと……みなさん、ありがとございました」

こうして小森さんから依頼は幕を下ろした。

「これでしばらくは暇になるなーっ」

んーっと思ひをする朝弥に真実が横から言っつ。

「明後日からテスト週間だけど？」

伸びをしたまま朝弥が固まった。

記念に一枚（後書き）

次は秋雨さん！

3 (前書き)

秋雨です！

地獄のテスト週間が幕を開けた。

オレ達4人は、放課後、図書館に寄って勉強することにした。部室使えないって不便だよなー。

てことで、ここは図書館。

シャーペンの音とアメをなめる音しか聞こえない。

ガリガリ……ガリガリ……コロコロ…ガリガリ…ガリガリ……ガリ……ガリ……ボリッ

「あー、くそっ、朝弥アメ食うのやめろ！」

真実がいきなりオレに怒鳴った。

その瞬間、館内にいる人の視線が真実に集まる。

「まあまあ、落ちつけよ」

由輝に腕を引つ張られながら座った真実。

「さつきからコロコロうっとおしい。気が散る」

「えー、いいじゃんか。そんなに怒るなよー」

「よくない。集中できないんだよ」

集中できない!!疲れてる!!甘いもの。

オレの頭の中にそんな方程式ができた。

真実に棒付きアメを差し出す。

「……………何だ、コレ」

「棒付きアメ」

「じゃなくてさ。何でアメ？」

「疲れた時には甘いものじゃん」

「普通はチョコだよな」

「オレ、チョコ持ってねーし」

「……………ま、いつか」

真実は棒付きアメを取ると食べ始めた。

そして勉強再開。

長くは続かなかったけどな。

「も、無理……」

眞実が机の上につ伏した。

「オレも……」

眞実と同じように机につ伏す。

「はあ、これじゃあ赤点で補修になるよ」

「それは嫌ー」

「なら、勉強会をしようか」

突然の茜の提案。

「そうだなあ、土・日を使ってしようか。もちろん泊まりで。持っ

てくるのは勉強道具と必要なもの。いいね？」

「どこですんの？」

「言いだしつぺの茜ん家」

「僕ん家は駄目。つてか来るな」

茜がにつこーっと笑みをはりつけて拒否する。

「眞実ん家は？」

「俺ん家？んー、無理……だろうな。朝弥は？」

「オレ？別にいいけど、勉強にならないと思う。……ふっ」

「じゃあ駄目だね」

特に何も聞かずに茜の視線はある一点に集中した。

オレと眞実もそこを見る。そこには、

「俺？」

由輝がいた。

「そ。駄目かな？」

「別にいいけど、何も無いぞ」

「いいよ。勉強しに行くだけだから」

「そーそー。勉強（泊まり）に行くだけだし」

あー、楽しみだなー、泊まり。



3 (後書き)

次はプー太さん！

4人プラス  
(前書き)

プー太です！

## 4人プラス

「ただいまー」

「おつかえりいマイブラザー」

がばつと熱い抱擁付きの出迎えをしてきたのは俺ににーちゃん。俺と似ている顔でキョーレツなキャラの持ち主だ。

そのせいで何度トラブルに巻き込まれことか…。

「にーちゃん熱い。離れて」

「ちえー冷たいのお」

指と指をツンツンし合って口をとがらせても可愛くない。

いつものことだからスルーして部屋に行こうとして思い出した。

「土日、俺の友達が泊まりに来るから」

「え！？マジ！？真実もいるのか！？」

「そうそう。母さんにも伝えといてー」

「いやったあー？」

うれし過ぎて飛び跳ねるにーちゃんを放っておいて俺は部屋の片づけをすることにした。

土曜日。

朝、珍しくにーちゃんが起きていた。

どこかに遊びに行くのか知らないが服を着替えて、髪までセットしていた。

「今日何かあんの？」

「あるよ！あるに決まってるじゃんか！」

鼻歌まで歌いだした。

勝手にデートか…？なんて決めつけて、あえてのスルー。

「早く来ねえかなー」

…来ねえかなーだって？

「にーちゃん、もしかして…」

ピンポン

「来た！」

ダダダダと光の速さで駆けて行ったにーちゃん。

最悪だ…。

「まっことー！久しぶりだな！でっかくなつてー！本っとお前可愛いいい！」

後をおっかけて玄関に行けば真実がにーちゃんに捕まっていた。

「あいかわらずっスね、秋良サン」

その後ろにはこの場面を激写する朝弥と、硬直する茜。

真実に助けってくれと目で訴えられて苦笑いしながらにーちゃんをひきはがした。

「とりあえず入らない？」

「そうさせてくれ」

1日目から疲れそうだ…と頭を抱えた。

所変わってリビング。

俺は飲み物を準備していると話声が聞こえてきた。

「初めまして、僕は西川 茜です。よろしくお願いします」

「どーもオレは南沢 朝弥です！よろしく！」

「ふむふむ…みごとに東西南北がそろったわけね…。おもしろい。

えーつと俺は知つての通り由輝の兄で、秋良。よろしくう！」

…なんか空気やばくないですかね。

シラけてるよな、これ。

「よし、飲み物準備できたから俺の部屋行くぞ」

「…うん」「」

なんとかあの空気から救出してそそくさと逃げる。

「うわーなんか由輝ってカンジだな」

「あ、ギター…じゃなくてベースがある。由輝音楽やってたんだ」

「由輝のベースは上手いぞお？弾いてみるよ」

「…なんでいんの、にーちゃん」

「いーじゃんよお！俺だけ仲間外れにするな！寂しいじゃんか」  
どさくさにまぎれて参加してるにーちゃん。

「大丈夫だつて！勉強は邪魔しねーよ！」 キラーン  
グツ！つと親指を立てて、ウインクされてもねえ…。

「いーじゃん！人多い方が楽しいって。なー茜」

「…え、うん…そうだね」

なぜ君はそんなにルンルンしてるんだ朝弥は…。  
もう知らないぞ、俺は。

4人プラス  
(後書き)

次は緋紹さん！

要領がいい…天才？（前書き）

緋紹です！

## 要領がいい…天才？

俺は自分の歴史上最も難しい（見たことのない）問題に直面していた。

『次の値を求めよ。』

(1)  $(-64)^{3分の2乗}$  『

こ…っ、公式が…、公式があつたはず…？思い出せ、俺？海馬よ働け？まだ若いはずの俺の脳よ？

由輝と茜を見るとすらすらと解いていつている。

朝弥は途中で止まっていた。

3分の2つてなんだ？なんで指数なのに分数なんだ？何乗すればいいんだよ？

授業ちゃんと聞いているのに何故わからない！？

「真実、なんで解いてないの」

茜が不思議そうに聞いてきた。

「逆になんで解けるの？」

「いや、公式あるじゃん」

由輝が少し汗を浮かべて言う。

「公式使つても解けねえよ？」

朝弥がシャーペンを指で弄びながら口の中でアメを転がす。

公式も思い出せません。何故。

「これちよつと発展問題だからな」

由輝が教科書をめくってあれこれと教えてくれた。

でも…

「わからねえ…」

頭を抱える俺の頭を由輝が叩いた。

「なんでだよ？もう3回も説明したろ？」

「なんでここがこうなの？」



「だから？」

「はい、休憩？」

俺と由輝の間にクッキーが差し込まれる。反射的に食いついた。

「糖分しつかりとらないと。わかるものもわからなくなるよ？」

「秋良さん……」

「にーちゃん」

「はい由輝の分」

秋良さんが由輝にクッキーを渡してこっさりウインクをしてくる。

由輝が不服そうにそれを受け取ってかじった。

ありがとうございます？

「ありがとうございますーす」

「すみません」

朝弥と茜にクッキーを渡し終えた後、秋良さんが後ろから問題を覗き込んできた。

「あー指数の計算かー。真実達、面倒なところやってるね」  
俺は項垂れる。

「はい……」

「にーちゃん、わかる？だったら真実に教えてあげられない？」

んー？と秋良さんが問題に目を向けたまま声を出した。

「いいけど。どうする？真実」

その手があったか？

「秋良さん？お願い？」

数分後。

「……てことは……( - 6 4 ) 3分の2乗〓 ( - 2の6乗 ) 3分の2乗

〓 ( - 2の6乗 ) 2乗」 3分の1乗〓 ( 2の12乗 ) 3分の1乗

〓 2の4乗、イコールで16？」

窺うように秋良さんに目をやる。

パチパチと秋良さんが拍手をした。

「そう？よくできました？」

「すげー」

朝弥が目をパチクリさせる。

「わかりやすかった」

茜が感嘆の声をもらした。

「ありがとう秋良さん？」

「いえいえ可愛い真実のためなら？」

「……………ありがとう？」

「今の間きつついよ真実ー」

ズコツとストローで飲み物を飲みきった朝弥が口を開いた。

「秋良さんて今、何年ですか？」

「え？3年」

「まじすか！？受験まっしぐらじゃないですか？」

「ところがどっこい？もう終わってるんだ俺？」

「え？」

由輝以外が変な声を出した。

「推薦で一足お先に合格です」

…そうだった。

秋良さんはそういう人だった…。

要領がいい…天才？（後書き）

次は夕さん！

お泊まり会(前書き)

夕です!

## お泊まり会

「なんか、こういうのっていいよね」

借りた布団を由輝の部屋に並べる。

「オレ窓際がいい？」

「朝弥は壁に穴開けるだろー、俺だよ？」

「オレ、そんなに暴れねーし？」

「まあまあ、落ちつけよ」

朝弥と真実が場所の取り合いでケンカしだして、それを由輝が宥める。

結局壁際は朝弥が勝ち取った。

「うつわぁ…朝弥の隣かぁ。蹴らないですよ？」

僕はその隣。

蹴られるどころか夜中僕の上で寝てたりするんじゃないだろうか。

「で、どうする？まだ勉強するよね？」

「俺はさんせー」

由輝と僕はいいけど、あの2人がねえ。

“勉強”っていう単語を聞いたとたん、寝たフリをする朝弥と遠い目になる真実。

数学の教科書で朝弥をべしっと叩き起こす。

「……オレ、寝てるし」

「寝てる人はしゃべらないよね」

「寝言…」

「寝言ねえ。うん、寝て言おうか」

もう一度べしつ。

「そこのお2人、遊んでないでやるぞー」

あ、真実が由輝につかまってる。

転がったまま数学のワークブックを広げる。

「うつ…俺には暗号にしか見えない…」

「オレには暗号にすら見えない…」

勉強？を始めて30分。時刻は午後10:30。

「そついえば秋良さんて、どこの大学行くの？」

ごろごろ転がりながら真実が言った。

あれだけ場所取りしてたのにもう布団はぐしゃぐしゃで、どれが誰のかわからなくなってる。

「にーちゃん？紫祈しきって言ってたけど」

「紫祈いいいい！？由輝今なんて？」

「紫祈大学って言ってた」

真実が驚くのも無理ない。

なんたつて紫祈大学は“超”がつく有名大学だ。

「しき？どこだそれ、この近所か？」

「朝弥知らないのか！？」

「おお…」

朝弥が真実の迫力に押されげみ。

「ここからはだいぶ離れてるよ。秋良さんこの家出るんだ」

「次の春からな」

「えーオレやだなー。秋良さんおもしれーから」

まくらを抱えて不貞腐れる朝弥。

「朝弥も紫祈に入ればいいじゃん。そしたら会えるよ」

「場所も知らねーのに入れるかつ」

「入れるよ。今からでも勉強すれば僕が教えてあげるから」

「そんなところ入学したら毎日勉強ばかりだろ。はあ、秋良さんすげえな」

僕らにしたら紫祈なんて夢のまた夢だもんなあ。

「とりあえず、再開しようか。ほら次は世界史？」

「「うえーい…」」

「朝弥と真実がシンクロしたっ」

あんまり上を見過ぎててもよくないはず。

今は自分のできることをやってればいいよね。

「茜ー、ここはー…?」

「僕に聞かないで、由輝に聞けば?」

「ええ!？」

初めての勉強会。部屋の明かりが消えたのは午前0時ちょうどだった。

お泊まり会（後書き）

次は秋雨さん！



3 (前書き)

秋雨です！

テストは無事に終わり、今日は結果がわかる日。  
順位が書かれた紙を渡される。

何位だろ。

席に戻る。

そろーつと紙を表にする。

“320人中151位”と書いてあった。  
中間よりちよい上か。

「茜ー、どうだった？」

「なかなかよかったよ」

「何位？」

「19位」

ほら、と言ってオレに紙を見せる。  
む、たしかに19位だ。

「よう、皆さん。どうだった？」

由輝が真実を引っ張ってきた。

真実はぼけーつとしていて、心ここに在らず。

「真実どうしたの？」

「あー、ちよつと順位が悪かったらしくてさ」  
「真実の順位かー」。

……気になる。

「何位だったんだ？」

「……………い」

「聞こえねーし」

「238位だよ、このやるーつ？」

いや、キレられても……………。

「そつ言うお前らは何位なんだよー！」

「オレ151位」

「俺は43位」

「僕19位」

オレらの順位を聞いた真実は、どうせ俺なんて……とつぶやきながら、教室の隅できのこを栽培し始めた。

そんなにシヨックだったのか。

「真実、アメやるよ」

真実に棒付きアメを差し出す。

「……………もらっとく」

そのアメをとって食べる。

ようやく真実の表情が緩んだ。と思ったら、

「あ、そういえば赤点だった人は追試だったよね」

茜の非道な一言。

真実のテンションは一気にダウン。

「真実、何教科赤点だったの？」

「……………4教科」

「ぶっは！真実ばっかでー！俺赤点なかったしー」

「すげーだろ、奇跡だろ！？」

「ギリでなかった？勉強会ばんざい？」

「あーあ、真実は追試かー」

「追試も赤点だったら夏休み返上で補修だよね」

「……………というわけで」

由輝と茜の目がキラッと光る。

「真実のための勉強会を開くか」

「追試は3日後だったよね。その間みっちり教えてあげるよ」

その時の2人はとてつもなく怖かった。

3日後の追試で、真実は赤点をとらず、補修を免れたらしい。

3 (後書き)

次はプー太さん！

暑い！（前書き）

プー太です！

暑い！

夏休みに入って早3日。

宿題を半分近く終わってしまいすることがない。

うだるような暑さの中

俺はベッドに転がってアイスをかじっていた。

「あちい…セミの野郎め、余計熱くなるだろうがバーカ」  
片手にアイス。もう片手にうちわ。

扇風機返せよにーちゃん…。

何をしようにもやる気は出ず、ただひたすらに天井を眺めていた。

久々に働くケータイのメール…いや、電話か。

腕1つ動かすのがだるくて動きがスローになる。

「もしもし」

「遅い！何コールかけたら出てくれるのさ！」

「ああ…茜か。どーした？」

やけに切羽詰まった声だなあ、オイ。

「今日！夜！お祭り！」

「へー…で？」

「4人で行くよ!?!？」

「あーそういうこと。おーけーおーけー。何時？」

おっと、アイスが落ちてきた。

あつぶねー

「5時に駅前に集合だからね！真実に伝えといてよ？それじゃあ」

「ほーい」

集合は5時か。

ちなみに今はあーっつと…。

なんだ3時か。

ならあと2時間あるな。

何して過ごそうか。

何も売る気起きねーしなあ。

あ、シャワーでも浴びてくるか。

そうしよう、それがいい。

重い体を引きずってベッドから下りようとしたら床へ落ちた。

「いつてえ……」

そのおかげで腰が痛い。

ズキズキする腰を押さえながら俺は風呂に向かった。

「あー生き返る」

さっきまでとは違うアイスを口にくわえて部屋に戻る。

出かけるんだし服はこれじゃあなあ……。と思い、服を着替える。

その時点で時刻は3時半。

これ以上何かをしようとも俺一人じゃなんともなんねえから伝言もかねて真実の家に行くことにした。

ピンポン

「どちら様ですか？」

「由輝です。真実いますかー？」

「いるけど部屋でボールいじってるから上がってどうぞ」  
それからほどなくして玄関が開く。

「久しぶり！どうぞ上がっちゃって！」

「おじやましまーす」

出迎えてくれたのは真実の母さん。

いつ見ても変わり映えのない元気いっぱい楽しい人だ。

「今日の夜、真実かりますねー」

「デート！？」

「うん、そうそう」

そんなこんなで真実の部屋に到着。

ノックして部屋に入る。

仲にいたのは天井を眺め、仰向けに転がってボールを腹に乗せて扇風機にあたっている死体寸前のげっそりした真実だった。

「あー…バスケしてえ…けど暑過ぎてしたくねえ…」  
激しくデジャヴを感じた。



暑い！（後書き）

次は緋紹さん！

祭りー！（前書き）

緋紹です！

祭りー！

ドンドンと太鼓の音が鳴っている。

昇天寸前だった俺は祭りに近づくとび元気になった。

「真実？」

「おお？」

朝弥とガッツポーズを作る。

「「遊ぶぞー？」」

「うわ、ヤル気すごい」

茜が俺達を見て体を引く。

由輝が苦笑した。

「去年は受験ちらついであんま自由に遊べなかつたんだってさ」

「自由？」

茜が首を傾げる。由輝が真面目な顔で頷いた。

「精神がな」

「ふ、ふうん」

由輝の携帯のベースの形をしたピックのぶら下がったストラップがついていた。

「お、由輝つけたんだ」

俺の言葉に由輝が携帯のストラップに目をやる。ああ、と声を出した。

「あ、これが。気に入ったから」

「え、何？真実があげたわけ？」

茜が喧騒のせいで声が聞こえづらいのか声を少し張り上げる。ついでに耳を片方ふさいでいる。

「そう」

「なんで？」

朝弥が早速買ったラムネを飲みながら言った。

「誕生日だったから」

「え!?!」

朝弥と茜が声をそろえて目を丸くした。

「何それ? 聞いてないよ?」

「言ってるじゃないし」

「言いなよ?」

「なんで!?! 物ねだってるみたいじゃん?」

「オレ1月17日?」

「聞いてない?」

ヒデーと朝弥が叫ぶ。

「もー。何日だったの?」

茜が頭を掻きながら言った。

「5月の28日」

「けっ、結構前だね」

「あ、真実もつまりすぐじゃん? 来月だよな? 俺の記憶が確かなら」

「そー来月だから8月14日」

「ほんとにもうすぐだ」

「茜は?」

「3月1日」

「それはかなり先だな」

「うん。プレゼントよろしく」

「言っちゃおう!?! 言っちゃうんだ!?!」

そうこうしてる間に綿あめ食べてお面買って、水の入ったヨーヨーを買って朝弥の背にぶつけて「ああ手が滑った!?!」と叫んだりした。

その後朝弥に追いかけられ、近くの河原に逃げ込んだ。

「そっぴやこの時期に祭りって珍しいよな」

「そっぴや。いつもは盆の時期だよな」

「お盆にもやるみたいだけど。これはホタル祭り」

「へえ」

すっかり暗くなっていた暗闇に何か光った。

「さすが、祭りの名の通り」

茜が満足気に光を仰ぐ。

「蛍……」

「すげー。超いるじゃん」

「な。今年は大量に生まれたらしいぜ」

由輝が蛍を捕まえて手の中に囲った。

「……蛍ってさ……今日で死ぬんだって」

「そうなの!？」

「そうなの。……不思議だよね。最後まで、燃えるみたいに」

パチリと音がしてそつちを見ると朝弥が写真を撮っていた。

由輝がその隣に並ぶ。

それからしばらく、4人で蛍を見ていた。

祭りー！（後書き）

なんか最後らへん珍しいノリに…（^ー^；）  
次は夕さん！

まずは課題を終わらせる(前書き)

夕です！

## まずは課題を終わらせる

「よし、これでおしまいっ」

夏休みの課題をばんと閉じる。

今日は

8月1日、夏休みはあと1カ月まるまるある。

「それにしても暑いなあ……」

姉さんの部屋にはエアコンがあるのにさ、なんで僕は扇風機なわけ？  
差別？

んーっと思ひをして携帯を取る。

送信先はもちろん朝弥。

「…あ、もしもし？朝弥生きてる？」

「生きてる…とは言い切れない」

「どうしたの」

「課題が終わらないからに決まってるんだろおおっ？」

思わず携帯を目から離す。

「あとどれくらい？全部じゃないよね？」

「……激しく全部に近いけどな。あぁっ、俊？<sup>しゅん</sup>それオレのアイス

？」

電話の向こうで走り回る音が聞こえた。

ほんとに勉強してんのかなあ……。

「ごめんごめん。なあ、茜ー、教えてくれよー」

「いいけど、僕にそっちに行けって言っくんじゃないよね？」

「言わねえけど…じゃ、これから茜ん家行こうか」

そう言われて部屋をぐるりと見渡す。

僕の部屋には扇風機が1台。

ここに朝弥が来たら室温上昇しまくる決まってる。

「あー…うっん、来ないで。僕の部屋暑いからさ」

「オレん家よりはいいと思うけど」



「と、なると…」  
「あれ、ムシ?... って、おい？今度は純じゅんかつ、オレのアイスーっ」  
「真実と由輝は部活中だからなあ... うん、部室にでも行こうか。あそこなら風通しいいし、扇風機借りれるし」  
「弟、妹と騒いでいる朝弥はほっつといて一方的に電話をきった。」  
「母さーん、ちよつと出てくるからー」

久しぶりの学校。

朝弥はもう来ていて、いつものアメの代わりにアイスをかじっていた。

「あつかねー」

「よくそんなに元気だね、暑くないの？」

「アイス様のおかげで？」

「ぐっ？じゃないよ、まったく。」

これまた久しぶりに校内を歩いて部室にたどり着く。

「で、何ができてないって？」

窓を開けると風が入ってきた。予想通り。

「だあーかあーらあー、全部に近...」

「今まで何してたの」

「...遊んだり、遊んだり、遊んだりしてました」

朝弥が持ってきた課題をばらばらめくっていく。

やけに白いページが多い。

「よし、それじゃここから... ここまでしようか。今から30分  
で」

「うそお！？オレの3日分!？」

「いいから、や・れ」

できるわけねーし？とか言いながら1ページ目にとりかかった。

さて、僕は何しようか。

部室をうろつろ（朝弥の見張りをしながら）歩き回っていると、カ

マさんのくれた依頼箱に目がいった。

「まさかとは思っけど…」

これで依頼があればやることができる。  
ふたを開ける。

底にぽつんと入れられた白い紙。

「あ」

「茜ー、ここわかんね。…ん、どした？  
紙を出して朝弥に見せる。」

「依頼見つけた」

「

まずは課題を終わらせる(後書き)

次は秋雨さん!

3 (前書き)

秋雨です！

課題から逃げる口実を見つけた。

「依頼内容は？」

「待つて。真実と由輝呼ぶから」

茜が真実に電話をかける。

「もしもし、真実？僕だけど」

その後、由輝にもかけていた。

数分後、汗だくの真実と由輝が来た。

「あーあ ぢー」

「何でここにいるんだ？」

「涼しいから」

窓全開だから涼しい風が吹いてくる。

「たしかに涼しい」

由輝がイスに座り、真実は机に顔をつける。

「あー、つめてー……」

「で、どんな依頼？」

「これだよ」

白い紙を出す。

「依頼主はカマさん。内容は、“書類を届けてほしい”」

「場所は？」

「それは書いてないよ」

というわけで。

くわしい話を聞くために、オレ達は職員室に向かった。机から離れない真実を引きづりながら。

「失礼しまーす？」

いきおいよく扉を開ける。

ガラガラガラ ガンツ ガラガラガラ……ピシャッ

……あるえ？

後ろで3人が笑いをこらえている。

「あ、朝弥……、いきお……ぶはっ！」

言い終わる前に眞実は嘖き出した。

「眞実……っ、笑っちゃ……ぶっは！」

茜も嘖き出した。

「お、落ち着け……。朝弥、ゆっくり開けような」

「？おう」

今度は由輝に言われた通りゆっくり開けた。

職員室の中にいた先生の視線が集まっていた。

「あ、えっと、カマさ……鎌田先生いますか？」

笑いから脱した茜が言う。

「私に用かしら？」

カマさんが来る。

「依頼内容について聞きたいんですけど」

「ああ、それね。ちよっと待ってて」

自分の机に戻って封筒を取ってくる。

「これを大学に届けてほしいのよ」

「どこのですか？」

「獅心美術工芸大学。知ってるでしょう？」

あー、あそこか。

「誰に渡せばいいですか？」

「鎌田 梨沙しゅさって教授よ」

「鎌田 梨沙しゅさだな。鎌田 梨沙……」

忘れないように何回も繰り返す。

「じゃ、よろしくね」

3 (後書き)

次はプー太さん！

訪問（前書き）

プー太です！



## 訪問

「でっけー」

「門から違うね、世界が」

「レトロ！写真取り放題いいいい！」

「帰りたい」

「さっそく行ってみるか！」

帰ろうとする茜に封筒を押しつけて管理人さんに挨拶して元気よく  
大学に足を踏み込んだ。

「すっげえ……」

とにかく写真を撮りまくる朝弥を真実がひこずって、

今にも逃げだしそうな茜を俺がつかまえてズンズン歩く。

「高校より広いな、大学って。建物も多いし、でっかいし」

「迷うなよー？」

「真実、俺をなめるなよ？俺にはハイテクなケータイ様がついてる  
からな！」

「ハハツ そうだよな！」

「あつかねー、なんかすげえ女がいる。芸能人がいんのか？」

「答えてほしかったら僕を家に帰らせて」

「えー」

「アイスおごってあげるからさ？」

「？っそれは……」

異様に多い女子大生をかきわけて管理人室にたどり着く。

「すいませーん」

「はいはい。あら、見ない顔ね。どうしたの？ウチの学生ではない  
みたいだけど」

やけにはだけたお姉さんが登場。

俺が話しくそくにしていると代わりに真実が話してくれた。

「鎌田 梨沙教授にお届け物なんです。どちらにいらっしやるか教

えてくれませんか？」

「んー…鎌田教授？ああ、その人なら3棟の美術室にいるわよ。地図をあげるから行ってくれる？」

「はい。ありがとうございます」

「はいばーい、と手を振って管理人さんの下から去った。やけに親しいな、朝弥。」

「今の現在地がここで…3棟はあー…一番遠いじゃんか」

「ねーアイスおごってあげるから帰らない？帰ろうよ？」  
まだぐずっている茜に流石に疑問を抱く。

「なんでそんなに帰りたいがるんだよ。大学なんて滅多に来れないのに」

「それは…」

「もうすぐ依頼終われんだからいいじゃんか」

「でも可能性は…」

「暑いんだから早く行くよ。こら朝弥！一人でどっか行くな！」  
3棟にたどり着いて校舎に入ると、あら涼しい。

一気に力が抜けた。

「真実おー美術室どこおー」

「アハハ、ハハ…ごめん。俺にはわからない。ほら」

「うお…」

地図を見れば書いてあるのは準備室と講義を受ける教室と…大量の美術室。

「ですよーここは美大ですよー的な？」

「片っぱしからつぶしていくか？」

「オレ、由輝に賛成！」

「いや、ここは生徒さんに尋ねて連れて行ってもらおう」

「その手があつたか！」

「いいよね、茜？茜…？」

「この足音…」

茜の顔をのぞいてみると真っ青。

「だから来たくなかったんだ」

「茜？」

声優のように綺麗な声が茜を呼ぶ。

俺達3人はいつせいに振り返る。

そこにいたのは俺が女装した時とよく似た女の人がいた。

「姉さん……」

訪問（後書き）

次は緋紹さん！

衝撃的事実！（前書き）

緋紹です！

## 衝撃的事実！

「姉さん？」

身のこなしがすつきりした女の人が近づいてきた。声も張りがあった。凛としている。

「茜、何やってるの？」

茜の傍まで来ると目を瞬かせて首を傾げた。

茜が目を逸らし答える。

「ちよつと…部活で…」

「部活？あら」

茜のお姉さんらしい人が俺達の方を向いた。

「お友達？」

「あ、はい。どうも初めまして東山 真実です」

笑いかけて自己紹介をする。由輝もそれにならった。

「北村 由輝です」

「初めまして、茜の姉の綾子あやこです」

にっこり笑って返事が来る。

「なんてこつたいー？茜のお姉さん綺麗すぎる？茜のお姉さんでさえなければ？…一体どうしようというのかね。」

「よろしく…あら？朝弥もいるの」

「お久しぶりでえす…」

朝弥が茜を横目で見ながら小さく返す。

「ところで、どうしたの？部活って、社会見学部？」

「そんな部活ないよ？姉さん、今暇じゃないんでしょ、授業あるって言ってたじゃん？」

茜がグイグイ綾子さんの背中を押した。

「今、終わったけど」

「そ…」

茜が苦虫を噛み潰したような顔をして黙り込んだ。

すごいな、茜を黙らせる人がいるなんて。

「綾子姉さん、鎌田って人知ってる？」

朝弥が励ますように茜の背を軽く叩きながら言った。

「鎌田？」

「なんか教授やってる人らしいんだけど」

「…教授…」

綾子さんがしばらく考え込む。

「茜さ、どうもお姉さん苦手っぽかったけど、別に変な人でもねえじゃん」

由輝が小声で話しかけてきた。

「おお」

「なんで茜は、あんななんだろうなー？」

美人なのに、と由輝がもらす。

「そっくだよな…」

ああと綾子さんが声をあげた。

「あなた達が捜してるのって鎌田 梨沙さん？」

「あ、はい」

頷いて返す。

「どうして会いに行くの？まさか知り合いなわけじゃないわよね」

綾子さんが指を傾げた。

え？どういうことだ？

「まさかっつて？」

朝弥が尋ねる。

「すごい有名な方じゃない。美術品考古学者よ」

思わず口が開く。

水の中の金魚のようにパクパクと口を動かした。

『マジで！？』

全員の素っ頓狂な声が響く。

うんと綾子さんが頷いた。

カマさん、なんでそんな人と関わりがあるんだ？まさか、梨沙って名前してるけど、実は男で、名前変えてて、オネエ系の人なんだろうか。…オネエ友達？世界は意外と狭い。でもその世界では権力のある人みたいだし、そしたらちゃんと言前は出すか。じゃあ女の人かな。

ん、待てよ？鎌田って…鎌…。

ピシッと脳内自己映像がひび割れて粉々に砕けた。

「ゆ、由輝」

由輝もギシギシと音が鳴りそうなほどぎこちなく俺の方を向く。

同じ事を考えているに違いない。

「まさか…」

「あ、ほらあそこに。教授っ、鎌田教授ーっ？」

綾子さんが大声で呼ぶと人ごみの中を歩いていたショートカットの髪の女の人が振り返った。



衝撃的事実！（後書き）

次は夕さん！

姉さんなんて…（前書き）

夕です！

姉さんなんて…

「鎌田教授ー？ここですよー？」

姉さんに呼ばれて女の人がこつちに歩いてきた。  
シヨートカットでなんとというか…きれいな人。

「呼んだかしら？あら、その子達は？西川さんの知り合い？」

「これは私の弟で、あとは弟の友達です」  
これって僕、物じゃないんだけど。

「で、教授に用があるようなので…でしょ？茜」

「…そうだよ」

真実をちらつと見る。

それだけでわかつたらしい、真実が例の書類を出した。

「鎌田 梨沙さんですよ？カマさ…じゃなくて鎌田先生から預かりました」

「何かしら」

鎌田教授は、というかカマさんの奥さんは封筒から書類を出してぱらぱらつと目を通した。

「あの人…カマさんの奥さんに見えるか？」

朝弥が小声になる。

「…「見えません」「」」

「だよなー。カマさんが結婚してるのにも、びっくりなんだけど」  
4人でこそこそ話していると、姉さんが顔をのぞかせた。

「何の話？」

うんざりした顔になると、姉さんに肩をつかまれた。

「…姉さん、肩変な音が」

「えー？」

笑顔の姉さん。

真実と由輝がひいてるじゃん。

「…あなたたち、あの人に気に入られてるのね」

書類に目を通し終えた鎌田教授がぼつりと言った。

書類の裏に何か書き留めると、その封筒をまた真実に渡した。

「え、これ…」

「あの人に渡しといてくれる？」

「でも」

「いいから。あまりふざけたことをしないようにって伝えといてそれだけ言つと教授は行つてしまった。

「これをカマさんに渡せと…なんで？」

由輝が真実から封筒を受け取る。

「中見ればいいじゃん」

朝弥がかかるーく言つと、真実がべしつと叩いた。

「見んなよ!？カマさんはともかく、教授さんはぜえつたい怖いし。あの人怒るとぜえつたい怖い」

「うん、そんな気がする。…そろそろ帰ろつよ、ね？」

さつきから肩がメシメシいつてるような。

「茜、もう帰るの？」

「帰る。帰らせて」

「それなら途中でアイス買つといてくれない？箱ごと」

ああ…さつきと帰つてればよかった。

姉さんがただで帰してくれるとは思ってなかったけど。

「私のだからね。名前書いて冷蔵庫入れといて」

僕が拒否する前に姉さんは「次の授業行ってくるわ」とか言っていなくなった。

「茜…わかるよ、その気持ち」

同じく上の兄弟をもう由輝になぐさめられる。

「すみません、途中でコンビニ寄ってください…」

姉さんなんて…(後書き)

次は秋雨さん!

3 (前書き)

秋雨です！

茜の頼みにより、コンビニに寄ってから学校に戻った。

もちろんカマさんに報告するため。

「カマーさん」

真実が職員室のドアを開ける。

「カマさん……じゃなくて、鎌田先生ー、いらっしやいますかー？」

「鎌田先生なら資料室だ」

ゴツイ男の先生が教えてくれた。

こんな先生いたっけ？

「あざーっす」

カマさんがいるはずの資料室に向かった。

「カマさん」

資料室のドアを開ける。

中は、プリントや本やファイルが山積みになってて、今にも倒れそうだった。

「はい。誰か呼んだ？」

「オレ呼んだ！」

「その声は……誰かしら。今そっちに行くわね」

いろんな資料を倒さないようによけながら、カマさんが出てきた。

「あら、あなたたちだったの。用は何かしら」

「依頼終わったんで、その報告です」

「これ、鎌田教授からです」

真実が封筒を渡す。

「あんまふざけんなってさ」

「朝弥、性格に伝えなよ」

「ムリ。忘れた」

「はあ」

茜に溜め息を吐かれる。

「あら、ちゃんと届けてくれたのね」

書類を見ながらカマさんは笑っている。

「カマさん、この依頼って何だったんですか？」

「あら、北村君は勘がいいわね」

ふふつと笑いながらカマさんは説明してくれた。

「実は、他の先生たちが『万屋同好会はきちんと部活をしているのか』とか言ってるね。『問題児もいるし、そんなのできるわけない』って。私も実際にしているとところを見たことなかったから、反論できなくて。で、ちょうどいい機会だし、ちょっと確かめようと思って依頼したのよ」

おわかり？と言いながら聞いてくる。

「長すぎて始めしかわかんなかった」

「真実ばっかでー！」

「そう言う朝弥はわかってるの？」

「？……」

図星をさされて言葉に詰まる。

「簡単に言っと、部活をちゃんとやってるかどうかが確かめるためのカマさんのテストだったってことだよ」

「なるほど」

「それで、どうでしたか？」

由輝がカマさんに挑戦的な視線を送る。

「もちろん合格よ」

とりあえず、カマさんのテストはクリアした。

「なー、由輝ー。もし合格できてなかったらオレらどうなってたかなー」



「廃部とか？」

「ちよ、そんな不吉なこと言つなよ！」

「合格できてよかったね」

3 (後書き)

次はプー太さん！

部活帰りにて（前書き）

プー太です！

## 部活帰りにて

「あっちー」

弓を床に置いて胸元の布を持って少しでも涼もうと試みる。

「北村あ！お前は休みすぎだ！精神を集中させろ！」

滝のように汗を流しながら部長が怒鳴ってきた。

耳に鼻を入れて聞こえないふりをする。

「それに袴をちゃんと着る馬鹿野郎？」

俺は今、部活中だ。

今日も元気いっぱいやってる…つもり。それにしてもアレだ。

暑い。暑過ぎる。なんでこんなに暑いんだあゝ

あれからだらだら部活をして、帰宅する。

弓の摩擦で切れかけた指を眺めながら日陰を歩く。

なんでこんなに太陽は元気なのかなあ…落ちればいいのに。

「よ、由輝！」

「真実じゃん。お前は元気だなあ。まるで幼稚園児みたいだぞ」

「なにせバスケしたばかりだしな！」

「あー、なるほど。バスケは元気の源！的な」

「ピンポーン！大正解」

冬、雪の降った日に庭を駆けまわってるワンコを忠実に再現しましたといわんばかりの真実と遭遇した。

俺のHPは10…いや、20ほど回復した。

「部屋とかさ、冷房つけばいいと思わないか？」

「いや？夏の体育館に入った時のムワンとした熱い感じがないと部活ってかんじがしないからな！。でも同好会のところに扇風機は欲しいよな」

「……。変人」

「誰がだよ」

「真実」

「あ！茜発見？おーい！」

無視かよオイ。

俺の体力が回復した意味ないじゃん。

「元気を通り越して賑やかだね」

「誉めるなって」

「誉めてないからね、決して」

暑さにイラついてる様子の茜はいつもにまして口がきつい気がする。

それに屈しない真実はある意味すごい。それをスルーしてコンビニ

の袋を見て尋ねる。

「どっか行くの？」

「僕？僕はこれから朝弥の家に押しかけようかなって思って。2人は？」

「そこでバツタリではないけど、そんなかんじで帰宅中」

うわぁとしかめ面をして茜は呟く。

「運動部って部活が平日にあるから嫌だよな」

いや、部活は平日にあるものですよ、ほとんどは！とツツこみたかったがグツとたえる。

「そつだ。2人も朝弥の家に行く？あの家って何気に快適だから」

「行く！涼みたい！」これは俺。

「いきなり押しかけるのはちよつと…」こっちは真実だ。

「気にしないでいいよ。どうせ朝弥なんてカメラいじってるかアイヌ食べてるかのどっちかだし」

「それなら行こうかな」

「いい人ぶるなよ真実おー」

「由輝は少し遠慮をしろ。俺達一応部活帰りだからね？」

「茜、レッツゴー」

「ちよ、無視かよ」

茜について行き、朝弥の家を目指す。

そういえば朝弥ん家、初めてじゃん。楽しみだな。

「1つ言っとくけど、あの家は由輝のお兄さんよりキョーレツかも  
しれないからしっかりしてね。いろんな意味で」

「??？」

それから少し歩いて到着した。見た目は何ら変わらない普通の家だ。  
何がキョーレツなんだ？そう思ってしまうほどに。

「押すからね」

念を押すように行って茜はインターホンを押した。なんだか一瞬だ  
け嫌な予感がした。

さてさて、何があるんでしょうかね…？

そして、中から2つの声が返ってきた。

部活帰りにて（後書き）

次は緋紹さん！

弟妹達！（前書き）

緋紹です！



## 弟妹達！

「どちら様ー!?」

小1ぐらいの子供2人が声をそろえて走ってきた。  
女の子と男の子。

「茜とその仲間達だよ。朝弥いる?」

「おお茜兄ちゃん?また来たの!？」

「だって世の中暑いんだもん。しょうがないよね、俊」

「あーそりゃしょうがねえなー」

俊と呼ばれた男の子が頭の後ろで指を組む。

「茜兄ちゃん、いらっしやい?」

「邪魔するよ、純」

「うん?」

純と呼ばれた女の子が可愛く笑った。

俺と由輝は口を開いた。アルファベットのOの形のままぽっかりと開けている。

弟妹がいるなんて聞いてない。

「俊、純?兄ちゃん出るから部屋にいろっっていつも言ってるだろ?」

奥から朝弥が足音をたてて走ってきた。

「あれっなんで皆いんの?なんか約束してたか?」

「ううん、そこで会ったから、じゃ朝弥ん家行くかって。ね」

「そ、そう」

朝弥が汗を浮かべる。

なんか今、朝弥が常識人に見えるんだが。

「よお、朝弥」

朝弥に向かって由輝が手をあげて挨拶した。俺も手を挙げる。

「まあ、いいけど。上がれよ」

「おじゃましまーす」

「お、おじやましまあす」

中に入ると白い壁にたくさんのポスターが貼ってあった。

『昆虫戦隊 カブトマン』

「あーっ」

俺は思わず声を上げる。

由輝も同じように、俺の視線の先のものに気付いて声をあげた。

「何？」

茜が振り返る。

「すげえ？これまだやってんの！？」

「これ？」

茜が首を傾げた。

「カブトマン？」

「超おもしろいよな？」

俊が飛び込んできた。

「な？」

「兄ちゃんも好きなの？」

キラキラした目で俊が聞いてきた。

「今は見てないんだけど、小さい頃超ハマってた？カブトレッドが一番好きだった？」

「俺も俺も？」

俊とハイタッチをする。

「イエーイ」

「え、俺カブトブラックだったな」

由輝が唇を尖らせる。

「あ、ブラックも捨てがたいよな」

「うんうん」

俊がパツと部屋に飛び込んで何か持ってきた。

「これ見て？」

「おお、フィギュアじゃん？」

「かっこいいだろ」

「うん、すげえ」

もうコンプリート近い。いいなあ、俺も集めようかなー。

「こーら、俊。出したらしまっとけよ」

「わかってますよ」

俊が口を尖らせる。

それから俺の手を掴んだ。

「兄ちゃん、外で遊ぼうぜ？」

「お？おう」

ちらりと朝弥を見ると、仕方ねえなあというように溜め息をついた。朝弥って、お兄ちゃんなんだなあと思った。

弟妹達！（後書き）

次は夕さん！

炎天下ですよ、皆さん（前書き）

夕です！

## 炎天下ですよ、皆さん

と、いうわけでこの暑い中、外に遊びに行くことになった僕達。なんのために朝弥の家に来たのかわかんないじゃん。

「茜兄ちゃん行くごうよ」

「遊ぼうぜ？」

「うん、行くよ」

いやいや、若い者は元気ですね。

俊と純に引つ張られて家を出る。

「朝弥ー？遊びにいくなら、ついでに買い物お願いできるー？」

「うえー…」

朝弥は買い物袋といつものカメラを持って出てきた。

「朝弥は買い物行つてくれれば？俺達で遊んでくるから」

「いやいやいや、それはひどいでしょうよ？」

双子に連れられて来たのは、朝弥ん家から歩いて10分くらいのところにある公園。

「で、何して遊ぶの？」

さそわれた本人、真実が腕を組みながら聞く。

「鬼ごとか？」

「さんせー？」

双子は賛成ね…でもこの暑さの中で鬼ごっこする勇気は僕にはない。

「俊と純、それはやめない？もっとごう…涼しいの」

「えー」

「はいっ」

真実が急に手を挙げる。

「バスケ？バスケはっ？」

「真実、ちょっとこっちで俺と話そうか」

頭にはてなを浮かべながら由輝に連れて行かれた。どさくさにまぎれて日陰に入ってるし…あの2人。

「朝弥は？なんかやりたい遊びある？」

我関せずってかんじで写真をとっていた朝弥をつかまえる。

「オレ？オレは鬼ごで…」

ほっぺたぐにぐに。

「話、聞いてた」

と、双子 俊のほうに背中に一撃くらった。

「兄ちゃんを離せっ、カナブンマン？」

「いった、…カナブンマンん？」

「オレはカブトレッドだ？兄ちゃんを助けにきた？」

「ああ、カブトマンの話、続いてたんだ…」

両方の腕に純と俊がぶら下がってくる。

「重っ…」

朝弥を離すと2人は僕から同時に逃げ始めた。

「つかまえられるもんなら、つかまえてみるカナブンマン？」

「オ、オレの敵をとってくれー…カ、カブトマン…くっ」

「なんでのってんの、朝弥」

双子はピョンピョン飛び跳ねて、口々に「かかってこいっ」とか言ってる。

「……………仕方ないなあ」

俊に狙いをつけて走り出す。あと少しといつところでひらりとよけられた。

い、意外に速い…。

「やーい、弱虫カナブンマン」

今度は純…にも逃げられた。

「はあ…きっ…」

まだ日陰にいた由輝と真実が目に入った。

「茜ー、何してんのー？」

「んー」

2人に近づいて真実にタッチ。

「え、何」

「次のカナブンマンよろしく。僕はもうだめ……」

「鬼ご？」

「うん。カナブンマン兼の」

「で、俺が鬼なわけね。よっし、行ってきまーす？」

真実が走って行くと2人ともギャーと言いながら逃げていった。

…あれ、結局鬼ごっこになってない？これ。



炎天下ですよ、皆さん（後書き）

次は秋雨さん！

3 (前書き)

秋雨です！

俊と純が叫びながら真実から逃げている。

茜と由輝は日陰で話をしている。

そしてその光景をオレが撮る。

この状態が10分ほど続き、写真も結構撮った。  
で、ヒマ。

「真実ー、オレも混ぜろー」

未だに俊と純を追いかけている真実を捕まえる。

「おー、じゃ、朝弥が鬼な」

満面の笑みで真実がオレの肩に手を置く。

「よっしや、任せろ！」

がんばれーって言いながら真実は逃げていった。

「行くぞー！」

純に狙いを定めて走る。

「きゃーっ！」

純は真実のほうに逃げた。

「こっち来んな！」

真実は逃げるも、バテていたからすぐに捕まえた。

「真実が鬼だーっ！」

「またか……」

うなだれながら俊を追いかけ始めた。

何気なく時計を見る。現在4時30分。

「…………… ああーっ？」

買い物忘れてた！

「朝弥うるさい」

いつの間にか隣にいた茜に叩かれた。

が、今は関係ない！

「買い物行くの忘れてた！どうしようやばいやばい？」

「じゃあ行つてくれば？」

「そうする？」

ベンチに置いていた買い物袋を掴んでスーパーに行った。

「えーっと、肉と玉ねぎと……あ、俊、純、にんじん取ってきて」

「「はーい」」

なぜかついてきた俊、純、そして。

「真実はじゃがいも、由輝はルー。茜は……いいや  
いつものメンバー。」

「朝弥ん家の晩御飯はカレーだね」

「予測すんな」

やっぱり茜にも何かとりに行かせればよかった。

……いや、無理だ。後が怖い。

「兄ちゃん持ってきたー」

「これでいい？」

「いい、いい。なんでもいい」

俊、純からにんじんを受け取る。

「朝弥ー、じゃがいもこれでいいだろ？」

「おー」

残るは由輝。

「ルーこれでいいか？」

「おー……つてこれシチューのルーだし！」

「は？あの材料だったらシチューだろ」

「普通はカレーだ！もう一回行つて来い？」

由輝を追つて他の材料を取りに行った。

そのあともいろいろあったけど、無事に買い物は終わった。

3 (後書き)

次はプー太さん！

ボーイズトーク(前書き)

プー太です！

## ボーイズトーク

「あー食った、食った」

「朝弥があんなに料理が美味かったとは…」

「まあご飯が食べたければ朝弥の家に行けばいいよ。疲れるけど」

「たしかに」

「じゃあ僕はここで」

朝弥の家からの帰り道。

昼より幾分涼しくなったが、蒸し暑さは抜けない。

腰をさすりながら茜に手を振った。

「な」

「どうした？」

「盆祭りあるじゃん、来週あたりに」

「そうだった。行く？」

「行く。みんなで行こう！」

「祭り好きだな、お前」

真実の横に並ぶ。

横目で顔を見るとニヤけていた。

あ、今絶対、射的やってる。妄想の中で。

「でもさ、男4人で行動つてムサイよ、きつと。しかも人が多いの  
に」

「なら女子も誘えばいいじゃん」

うわお大胆。

当たり前じゃんと言いたげな顔でこっちを向いた。

「中元とか」

「さそえんの？」

「そりゃ簡単だろ。祭り一緒に行こうって言うだけだし」

「誰に言わすつもりなのかな…？」

「言いだしっぺの由輝」

「普通は真実だから。俺はそこまで中元と仲良くねえもん。無理だつて」

「えー！」

え、まじ！？うそ！俺が！？といった感じにキョドリ始めた。赤面して。

あれ？このかんじは…。

「好きなわけ？」

「ちがう！ただ、その、恥ずかしいだけだ！」  
なんだ違うのか。

言い終わってから不審な動きを続ける真実。

俺の勘は合ってると思っただけだな…。

「どうやって誘う？」

ニヤリと笑う。

「俺だけは無理！由輝も誘えよ、平方を！」

「いーよ？真実がちゃんと言えたらの話だけど」

「っ！」

あー可愛いな、コイツ。

「手紙で…でもいい…よな？」

「うんうん。なんでもいいよ」

微笑ましいよ、実に。

「けどね、今は夏休み真っ盛りだ。流石に家は知らないでしょ？ケ  
ー番は？」

「知ってるけど、さ」

「なら当日までに誘えよ。ちなみに報告待ってるから」

「けど！」

「あ、俺はここで」

「ちょ、え？由輝？」

「おやすみー」

そそくさと逃げて口を押さえる。

「プッ」



あの焦った顔：ぜってー好きだよな。

本人が気付いてないだけで。

「ただいまー」

「おかえり、弟よ」

うん、きつとそうだ。

ボーイズトーク(後書き)

次は緋紹さん!

デートでもいかがでしょっ？ (前書き)

絆結です！

デートでもいかがでしょう？

今俺は正座している。

寝間着の浴衣の隙間から暑さの中に夜特有の涼しい風が吹きこんできた。

そろえている膝の前に携帯が鎮座している。

表示しているアドレスは中元。

メールか、電話か。

「うーん……」

布団の上にごろ寝して仰向いたまま携帯を手に取った。

携帯からって緊張するんだよな。

耳から声だけが聞こえるのってなんか普通とは違うし。

「どうすっかなー……」

「何を？」

突然聞こえた声に慌てて飛び起きる。

「うわっ、母さんっ！」

部屋の戸から中を覗き込んでいた母さんが腰に手を当てて怒った顔を作った。

「真実ー？姿勢をきちんとなさい。浴衣が崩れてるわよ？」

「あーはい、すみません」

襟を引つ張って崩れていた浴衣を直す。

どうせ寝たら崩れるのになあ。っーか自分だって、腰に手をあてたりしたら、はしたのうございますよ？

「ねえ、真実？あててあげようか」

「んー？何をー？」

「女の子でしょ？」

この時ばかりは噴き出しそうになった。

なんでわかるんだらう、この人。

「な、何言ってる」

「あたりでしょ？そうよねー、ウチの真実を放っておく女の子がいるわけがないのよねー。姿勢から立ち振る舞いまでこの私が叩きこんだんだから」  
うんうんとしきりに頷いている。

「何言っただよっ、違っつて？由輝達に祭り行こうか行かないか聞こうとっ」

「由輝君相手に真実が迷うわけないじゃない」  
ズバツと言われて思わず押し黙る。  
た、確かに。

「ね、ね、あたりでしょう？女の子よね？」

家につれてらっしゃいと言い出した母さんの背を慌てて立ちあがって押す。

「ちげーよっ？もう、なんでもいいだろ！？」

「あっ、ちよつと？その子今度連れて来なさいね？」

「だーかーらー？違うんだって？おやすみ？」

戸の外でブーブー言っているのを無視して電気を消してさっさと布団に潜り込む。

掛けてあるカレンダーを見る。

祭りまであと3日。

まあ、それまでに言えばいいよな？

翌日、俺はバスケット部の練習で学校に来ていた。

「走ってきまーす」

「ほーい」

立てつけの悪い体育館の戸を開けて外に出る。

夏の日差しが容赦なく照りつけてきた。

学校から出て隣駅まで走ってまた学校へ戻る。

走行距離計12キロ。

1時間かけて学校に戻ってきた。

Tシャツの襟で汗を拭う。

運動場を横切っていると、ふと廊下を歩いている中元が見えた。

「おい、中元ー？」

「え？」

周りをきよろきよろと見渡して俺に気付くと窓から顔をのぞかせた。

「東山君？久しぶり？」

「久しぶりー」

窓に駆け寄って窓の棧に腕をかけて中元を見上げる。

「東山君、部活？でもバスケット部よね？どうして外にいるの？」

「ランニング行ってたんだ、隣駅まで。超暑い」

「ホントに暑そう。汗すごいよ？」

中元が苦笑いした。

「汗かきなんだよ。走ってる途中何度汗が目に入ったことか」

「アハハ。シャワー浴びたみたい。髪ぐしゃぐしゃだよ？」

中元が俺の頭に手を伸ばして触れた。

くくっていた髪が解ける。

「え！？」

ゴムが切れたかと慌てて頭を押さえると、ゴムを指で弄びながら中元が悪戯っぽく笑った。

「水、浴びてきて。頭だけだよ？ちゃんと拭いてね」

「え？」

なんのこつちやと首を傾げると軽く肩を押された。

「早く。くくりなおしてあげる。ぐしゃぐしゃになりにくいの、教

えてあげるから」

「あ、ほんと？やりい」

水道まで行ってビシャビシャと浴びる。

「タオル…タオルは…」

手探りで探すと誰かが渡してくれた。

「お、サンキュー」

顔を上げると中元だった。

「しつかり拭いて。風邪ひくよ」  
「はい」

ガシガシと拭いて終わったことを目で伝えるとベンチに座るように促がされた。

跨ぐようにして座ると中元が後ろへ座る。

中元の手が髪に触れた。

ゆっくり中元の指が髪を束ねていく。

「で、ここをこうして…」

「あーほんとだ」

「…わかってないでしょ」

「だって見えねえんだもん」

「もー」

中元がゴムでくくりはじめた。

「でも、隣駅までつてすごいね。私絶対走れない」

「そうか？酷い時ハーフマラソンぐらい走らせるけど」

「うわ？無理だ？」

「ハハハッ、死ぬ気で走った」

「大変だったねー。はい、できた」

ポンと肩を叩く。

「サンキュー。じゃ、俺戻るから」

「うん。バイバイ」

体育館へ向かう途中でふと思い出す。

あ？祭り？

振り返って中元を追いかけると正門を出るところだった。

「中元？」

「あれ、東山君？どうしたの？」

「あのさ、盆祭りの時、暇？」

「え？えーっと、咲と、初流ちゃんと、あと飛鳥ちゃんに行くけど」

「あ、ちようどいい？」

「え？」

よくわからなさそうにしている中元に向けてニヤリと笑いかける。  
むろん、照れ隠しだ。

「デートでもいかがでしょう?」

「へ?」

「盆祭り?一緒行こうぜ?」

「えっ...」

中元が赤くなる。

「ついでに俺の誕生日祝って?」

「ええ!?自分で言っちゃう!」

「いいじゃん。14日、当日なんだよ。で、どう?」

「私は...いいけど...」

「やった?行こうぜ?」

俺の言葉に中元が恥ずかしげに伏せていた目をあげて笑った。

「...うん?」

かえって3人に聞いてみると言っただけで帰っていった。

その晩、全員OKしたと電話がきた。

慣れない電話の向こうで、中元も緊張しているのがわかって、少し、ほっとした。



デートでもいかがでしょう？ (後書き)

次は夕さん！

お祭りへ(前書き)

夕です!

## お祭りへ

することもなく部屋で天井を眺めていると、真実から電話があった。

「何？こんな時間に」

「14日、祭りのこと覚えてるよな？」

「14日……」

「そっ」

「14日？それって…。」

「真実の誕生日って、14日だったよね」

「そうそう。プレゼント待ってるから」

「わかった、出店でなんか買ってきてあげるよ」

「ひでー」

電話の向こうで真実が笑うのが聞こえた。

それから2日はあつという間に過ぎていって、祭り当日。

日が暮れ始めてから家を出てきた。

「あ、朝弥。今日は早いね」

「おー、茜」

途中で朝弥と合流。次は真実と由輝。

「そういえば、真実の家って行ったこともないし、見たこともないよな」

「確かに。由輝の家は夏休み前に行ったけど。2人の家って近いんだっけ？」

「そんなこと言ってたかもー」

そんなこんなのうち由輝の家の前に着いた。

インターフォンに向かってから少しすると、すぐに由輝が出てきた。

「あれ、真実まだ？」

「まだって？」

「真実の家、この坂の上」

指差されたのは、今下りてきたばかりの長い坂。

「僕ここで待ってようかな…」

現実から目を逸らしながら言う。

ま、でもそんな心配はいらす、坂の上から真実が走ってくるのが見えた。

「お前らー、なんでスルーすんの!？」

俺、窓から呼んだのに?と文句を言ってる真実をよく見ると、あれ?

「真実、浴衣？」

さわぐのをやめて僕達を見る。

「逆になんで君達私服？」

「動きにくいから」

「オレに浴衣は似合わない」

「俺もー」

「祭りと言ったらこれだろ？」

それはいいけど、その格好でよく走ってこれたね。

とにかく、これで全員がそろった。

「みんな揃ったみたいだし、行く？」

「あー、ちよつと待った。まだ全員そろってないから」

「「「は?」「」」

「まだ誰か誘ってたの?めずらしいね」

「そういうことじゃなくて…」

耳当たりをカリカリかく真実。

「…中元、を…誘いました…」

「おーっ、がんばったな？」

由輝がいきなり真実の背中を叩く。

へえ、真実、中元さん誘ったんだ。…おもしろくなりそう。

「で、そしたら、他の3人も来てくれるらしいから」

「3人つて？」

やっぱり持ってきたカメラをいじる朝弥。

「うん、平方と吉野と小森ちゃん」

一瞬にして空気がひんやりしていったような気がした。

こうして今までで一番複雑な気持ちで祭りは始まった。

お祭りへ(後書き)

次は秋雨さん!

3 (前書き)

秋雨です！

少し遅れて来た飛鳥達と合流して会場に行った。  
会場はたくさんの人であふれかえっていた。

「おー、すっげえ人発見」

「こら朝弥、よそ見しない」

茜に頭を叩かれ、すげえ人を見失ってしまっ

き、金髪アフロっ？

写真撮つとけばよかった……。

「人、多くて迷子になりそうだ……」

「ちよつと真実、朝弥みたいにならないでよ」

「オレ迷子にならねーし」

「それを言うのはこの口？」

ぐにーつとほっぺをつねられる。

「いひゃいっ！」

「あんた達って本当に仲いいわよね」

平方が笑いながらこつちを見ている。

見てないで助けてくれよ！

「この中で団体行動は難しいな。ということでも2人組で行動しよう」

「はっ？」

由輝の言葉に反応した茜。

そのおかげで手が離れた。

「平方、行くぞ」

「えっ？ちよつと！？」

平方の手を掴んで由輝はさっさと行ってしまった。

「あの、中元。俺と行かないか？」

「うん、いいよ」

真実と中元もどこかに行った。



「飛鳥、オレらも行こーぜ」

「あ……、うん……」

飛鳥の手を取り、出店を巡る。

まず目をつけたのは金魚すくい。

「飛鳥、あれやろっ！」

「うん……」

「おっちゃん、2人分！」

「はい、300円な」

お金を払ってあの一、あれ。名前知らねーし。まあ、いいや。金魚すくうやつを受け取る。

「あ……、お、お金」

「ん？ああ、気にすんな！はい」

さっきもらったやつを1つ渡す。

「あ、あり……が、と……」

少し俯きながら受け取ってくれた。

「お若いねえ」

よく見ると、店のおっちゃんがこっちを見てニヤニヤしていた。

「うっせ！」

しやがんで金魚を見る。

隣では飛鳥が金魚を取り始めていた。

器の中にはすでに金魚が3匹。

負けられねー。

闘志を燃やして金魚をすくっていった。

金魚をすくいすぎて店のおっさんが泣いていたのは祭りの常識。

3 (後書き)

次はプー太さん！

由輝サイド（前書き）

プー太です！

## 由輝サイド

「平方行くぞ」って平方の手を掴んで遠ざかる俺。

真実：漢<sup>オトコ</sup>を見せるんだ！心の中で真実を応援しておく。

にしても俺、いいことした。うんうん。1人で頷いて、ハツとした。皆バラけていい感じになってくれればいいんだけどなあー。

「どこ行くのって言うてんの！」

ぐいっと強く手を引かれて振り返ればけっこうな勢いで平方が怒っていた。

「どこ行きたい？」

「なんで聞き返すかな、もう……」

「平方、アレ美味そう。行くぞ！」

「ちよつと！」

はしまきって書いてある屋台の前に立つ。

「うまそー」

はしまきはお好み焼きを箸に巻いたことを言うのか、ふむ。

「あんたねえ、人の手を引いて走らないでよね。ただでさえも人が多いのに」

「おじさん2つ！」

「あいよー」

ブツブツ怒る平方はどうも扱いにくい。

アハハーと笑い飛ばしておく。

「お待たせ。500円ねー」

お金を渡して、はしまきを受け取ると1つを平方にあげた。

「あんなのでしょ！自分で持ちなさいよ」

「だって手えつないでるし、2つ持てねえよ」

「なら離せばいいじゃない」

「離れたら迷子になるだろ」

「は!?!」

「どつか人の少ないところ行くぞ。立ち食いは無理そうだし」  
未だに怒る平方を無理やり引っ張ってまた移動する。  
これ以上怒られるのは勘弁してほしい。

けどさ、

「なんでぶつかってくるのよ！」

「お前がぶつかってんだろ！他の奴とぶつかれよバカ」

「誰がバカよ！バカって言った方がバカなのよバーカ？」

なんで角1つないのにこんなにぶつかるかな…。

くつ踏むし、ぶつかるし、はしまき落としそうになるし。

平方の隣を歩くのは骨が折れる。

「ここらへんでいつか」

「ったく…私は飛鳥達と回りたかったのになんであんたと2人きり  
にならなきゃなんないのよ…」

人気の少ないところに来て、適当な物に腰掛ける。

「俺ってそんなに嫌われてんの？ま、食べれば？はしまき」

「別に嫌ではないわ。ただ…久しぶりに皆で遊べて嬉しかったのに  
って思っただけ」

はしまきを1口食べる。

時間が経ったせいか、少し固くなっていた。

チラッと平方を盗み見れば申し訳なさそうにはしまきをかじってい  
た。

「…ごめんな」

「謝ってほしいわけじゃないわ。どうせこれから皆を探そうとも無  
理なもの。ねえ、悪いと思うなら何か1つおごりなさいよ」

「はいはい」

そのつもりではしまきあげただけだなあ…。

はあ、と1つ溜め息を吐いたら平方のはしまきはすでに姿を消して  
いた。

「レッツゴー？」

「うおっ」

今度は平方に手を引かれて走り出す。そのせいで少ししか食べてないのに落としてしまった。

「これが欲しい！」

おめあての屋台の前で立ち止まって指差したのは悪趣味なお面。

例のあのキーホルダーを思い出すようなナンセンスな代物だ。

苦笑いしながら買ってやると、空気を震わす大きな音が響いてきた。

「花火だ。たーまやー」

「真実は上手くやれてんのかなあ…。」

ようやく機嫌を直した平方と一緒に空を見上げた。

由輝サイド（後書き）

次は緋紹さん！

真実の場合（前書き）

緋紹です！



## 真実の場合

自分で誘つといてなんだけどさ。

今日は特に緊張する。

中元を見ると恥ずかしそうに微笑み返してきた。

女子と遊んだことなんて中学の時までにも何回かあった。

手をつないだこともあるし、もちろん2人つきりつてこともあった。

けど、今ほど緊張したことはない。

「東山君が浴衣って…意外」

「そう?」

帯の位置を直す。

雑踏で声あまり通らないため少し声をはりあげた。

「うん。なんか着慣れてる?」

「まあね」

「ふーん」

不思議そうにしている中元を見て笑う。

「中元は浴衣あんま着ないんだ?」

「そうそう着るもんじゃないって」

「ああ、そうか。そうかな」

白の布地に大ぶりの桜柄が映えている。

「似合うな。女子ってそういうの選ぶの上手いよなあ」

「え……」

少し赤くなる。

「よし、行くか。中元、行きたいところある?」

「ううん、特には」

「じゃあ全部回るか?」

「うん」

並んで歩きだす。

少し歩いていると急に中元がいなくなった。

「中元？」

あれ、どこ行つた？

慌てて後ろを振り向くと人ごみに押されて進めていない中元が見えた。

「…ひ、東山く……っ、ちよつと待つ……」

人にもまれながらこつちに来ようとしている。

「すみません」

人ごみをかきわけて中元の下へ向かうと中元がすまなさそうに立っていた。

「う、ごめん」

「いや、まあ仕方ねえって」

「あー、グチャグチャ……」

浴衣をつまんで溜め息を吐く。

ちよつと笑つて浴衣を引っ張ると形を整えた。

「ほい直つた？」

「わ、ありがと」

少し迷つて手を差し出す。

「はい？」

「え？」

「はぐれたくないじゃん？一人で応答もなしに話し続けるってけっこう精神的につらいんだぜ」

小さく噴き出した。

軽く弾むような声が響く。

「じゃあ甘えちゃおう」

中元の手と自分の手が重なる。

熱くなつた顔を背けて歩きだす。

いろいろと見て回りながら中元にちよつかいを出さずにはいられなかった。空いている片手を出してそこにタッチさせようとする。それを見て中元が手をタッチしようとしたら手を引っ込める。これが

なんというか、飽きないのだ。何度やってもだまされる。

「もうっ?」

意地になって手を掴もうと手を伸ばしてくるのを避けた。

悔しいのかそれに夢中になっている。まるで猫じゃらしを追いかける猫みたいだ。

「ちよつとつ、東山君!?人が悪いよ!?!」

「あーやばい」

思わず笑ってしまう。口に手を当てた。

「可愛いなー。一匹家に欲しい」

「え……」

一瞬中元が固まって段々赤くなってきた。

俺自身も思わず自分の言葉に焦る。

な、何だ、欲しいって。可愛いって、なんだ。セクハラだぞ、俺!

「あ、いやっ、猫みたいで、ついっ、ほら、猫じゃらしがさっ」

ああああ何言ってるのかわかんなくなってるー?

「あ、そ、うなの、へ、へえっ」

あー向こうもわけわかんなくなってる納得しちゃったー?

「…行くか…」

「う、うん……」

それから少し経って、そろそろ休憩しようということになった。

「もうそろそろ終わっちゃうねー」

「残念だよなあ。楽しい時ってすぐ時間すぎねえ?」

「あーわかるかも」

祭りの行われている神社の石段に座っていた。

人ごみから外れて雑踏の声が遠い。

「…あのさ」

中元が改まったようにこっちを向く。

「ん?」

「……………はいこれ？」

ポンと大きな包みを押しつけるように渡された。  
思わずキョトンとする。

「え？」

「誕生日おめでとう？」

「あ、まじで！？くれんの！？」

「う、うん」

小さく頷く。

開けるとタオルが入っていた。

赤いタオル地に黒い縁取りとボーダーの柄がプリントされている。

「やった？数なくて困ってたんだよ？」

「そう？な、ならよかった」

ちよつとホツとしたように表情が緩んだ。

「ありがとな」

笑って中元の顔を見ると赤くなっていた。

嬉しいのと気恥ずかしいのとで俺も顔が熱くなってくる。

袋にしまって立ち上がって石段を飛び降りた。振り返って中元を仰ぐ。

「大切にするよ」

「あ、ありがとう」

降りてこようとした中元が足をひねった。

「わっ」

「うわっ」

落ちてきた中元を反射的に抱きとめた。

火花が上がって明るくなる。

「あ、ありがと…」

「お、おう…」

少し間を開けて嘖き出す。

なんてタイムリーな？

「な、何！？」

「いや…」

しばらくそうつして大笑いしていた。

**真実の場合（後書き）**

次は夕さん！

善哉とくしん(前書)

夕です！

## 茜はといつと

「なんで私と西川が残されたわけ？」

「いやー…僕に聞かないで？」

みんながばらばらの方向へ散っていった、その場所から動いていないのは、僕と吉野さんだけになった。

「私達も歩く？」

「い、いいけど…」

「もちろん買物全部西川のおごりでね」

「……はあ」

吉野さんがちよつとムツとした顔になる。

「私とじゃ楽しくない？みんなについていけば…って思ってる？」

「そ…んなことない、けど…うん…」

何の話をするばいのか分からないのです…とは言えず。

「じゃあ、行こう。まずは食べ物、んーたこ焼きにしましょ」

一方的に手を引っ張られて屋台の前まで連れていかれる。

「おじさん、2つ。西川、お金払ってよー」

「はいはい…」

買ったたこ焼きを持って人ごみを抜けた。

人ごみは苦手だからこっちのほうありがたい。

「真実どうなってるかなー…」

「ああ、舞と東山君ね」

ついもれてしまった言葉に吉野さんは意外な反応をししてしめす。

「え、知ってた？」

「そりゃわかるでしょ。2人共わかりやすいから」

「それは同感。あ、たこ焼き食べる？」

「飛鳥はばればれよね。南沢のことだけ名前で呼んでるし、いつつもくつついてるし。…10個入りだから、5個ずつね」

そうしてまた無言に戻ってしまった。



たこ焼きが全部なくなるまでが僕にとってどんだけ長かったか…。  
吉野さんは気にしてないみたいだけど。

「ごちそうさまでした。つと、次はどこ行く？」

「僕は…どこでもいいけど…」

「それなら西川のお金が尽きるまで回ろうか」

「……………」

急に吉野さんがはあと溜め息をついた。

「なんでそんなに静かなのよ…男でしょ？もっとさわぎなさいよ、  
せつかくの祭りなんだから」

あきれた、とでも言うように肩をすくめてみせる。

「やっぱり私とじゃ嫌なんだ……………」

今度は目に手をやる。

「ひどいよ…せつかく来たんだし、楽しみたかったのに…っ…」

「え、え！？」

泣いてる…ば、僕が悪いの！？

「も…、最悪…っ、私帰る…」

そう言っ僕に背を向けて神社の石段を降りようとする。

「……っ」

「えー!？」

そんな吉野の腕をとっさに掴んだ僕。

「…ごめん、そういうつもりじゃなくて、ただ…」

「……………」

しどろもどろな僕を見て吉野はまた溜め息を吐いた。

「しょーがない、今からでも私を楽しませてくれたら許す。まずは

「

涙はあつという間になくなってている。

「え、今まで泣いて…」

「忘れた？私は映研部の紅一点なの、嘘泣きなんていくらでもできるの」

「だましたな!？」

「そうそう、その勢いでいいの。輪投げとかどう？私結構うまいけど」

「受けて立つ？僕も意外にうまいから」  
そんなこんなで普通に話せるようになってるのも気付かず、2人で輪投げの屋台のほうへ歩いて行った。

「はい、お金よろしくー」

「あのね、吉野さんも出してくれないかな。僕だけは不公平だって」  
「これで私に勝ったら考えてあげる」

「わかった。僕が勝ったら最後まで吉野さんが払うんだね、うんわかった」

「ちよつと、そんなこと言っていない！」

「よいい、スタート」

「こらあっー！」

結局輪投げ勝負はどちらも1回も成功せず、ひきわけ。

「……」

勝負は次の金魚すくいに持ち越しになった。

「私金魚すくいは上手いからね」

「さつきも言ってたよね、それ。ま、僕のほうが上手いからいいけど」

ぎゃーぎゃー言いながらいろんな屋台を回って、それでも結局は引き分け。

最後の最後まで僕が払うことになった。

「あー楽しかった」

「そりゃよかったです」

「西川も普通に話してくれるようになったし。ほんと……よかつ……」

「あーはいはい、また嘘泣きってゆうか演技でしょ……」

「よくわかったわね、今のがんばったのに」

その時、祭りのクライマックスを告げる花火が始まった。

「きれー……」

吉野さんにつられて僕も空を見上げる。

され、他のみんなはどんなかんじでこの花火を見てるんでしょうかね。

「花火を見ながらもう1度輪投げってどう？」

「…こりないね」

僕はこんな感じですよ。

3 (前書き)

秋雨です！

重い思いに過ごした盆祭りもあっという間に終わった。

飛鳥達と別れて4人で帰り道を歩く。

「夏休みも残り2週間か」

「何すっかなー」

「暇だよなー」

「じゃあ、朝弥ん家に泊まろうよ」

「「賛成」」

「おー……ってちょっと待て！」

ノリが軽すぎてついつい了解してしまった。

「朝弥の許可も出たし、いつ行く？」

「いつでもいいけど」

「最終日とか？」

「いいね。じゃあ最終日、いる物持って朝弥ん家に集合だね」

「おー。じゃ、またな」

「じゃーな」

「僕も帰る。ばいばい朝弥」

「おー……」

口をはさむ間もなくいろいろ決まっっていて、気付けばみんな帰っていた。

オレ、許可出してねーし……。

時は流れて最終日。

チャイムが聞こえて出てみたら荷物を持った3人がいた。

……本当に来たし。

「やつほー。約束通り来たよ」

「俊と純いるかー？」

「おじゃましまーす」

追い返すなんてことはできないからオレの部屋に案内する。

「あつ、荷物そこらへんな」

「ほーい」

真実が荷物を置くと、続けて茜と由輝も置いた。

「そうそう、明日はここから学校行くからよろしくね」

「オレそんなこと聞いてねーし！」

「言っでなかつたからね」

ジューズとか持ってきてーって言われて茜に部屋を追い出された。

オレ、いいように使われてる？

……ま、考えてもわかるわけねーし、忘れるか！

「持って来たぞー」

扉を開けると、ゲームの対戦をしている真実と由輝、それを観戦し

ている茜がいた。

「朝弥遅かったね。双子に捕まってた？」

「そこだあつ！」

「させるかつ？」

真実と由輝が俊と純に見えてきた。

「兄ちゃーん、遊ばーっ！」

「あつ、茜兄ちゃんがいる！」

…本物が来たし。

「俊と純もやるか？」

「「やる？」」

2人はすぐに真実と由輝の間に移動した。

そんなこんなで夜は更けていった。

3 (後書き)

次はプー太さん！

違和感だらけ（前書き）

プー太です！



## 違和感だらけ

「ごめんつてばー」

「お前は反省の色が見えん！反省文5枚書け？」

俺は今、生徒指導の先生に怒られていた。

ぐちぐちとかれこれ30分ぐらい。

正座だから足が痛いしさ…。

「くああ…」

「北村あああ！」

「大変よ！」

「え？」

あくびをしてたら殴られそうになってカマさんが飛び込んできて

…

今、俺どうなってるの？浮いてるよね、コレ。

カマさんに馬力で腕を持たれて、宙を浮いてるっばいです。

事の始まりは朝。

俺のねぼうから始まる。

2学期の初日だから、今日は始業式。

始業式をまるまるすっぽかして大大大遅刻をして、教室に入ったところを連行された。

放課後つばい時間までガミガミ言われてるとカマさんの手によって助け出された。

形はどうであれ、説教は終了。

反省文もなし。

すべて円満に収まった。

「あの一」

行き先もわからずただ引つ張られている俺。

カマさん、搦んどるとこ痛いんだけど…。

「なにが大変なのさー」

「いえ、これといって何も無いわよ。依頼がきたからあなたを呼びに…連れ出しにきた口実よ。まったく手間かける子ね」

「あ…どうも」

急に手を離されて床に落ちた。

「いてて…」

「今回の依頼は少し難しいいわよ。風変わりしてる感じね」

「別にどんなんでもいいよ。内容なんて興味ないし」

尻をさすりながら立ち上がり、部屋に向かって歩き出す。

「あんたねえ！」

「困ってる人を助ける。それが万屋同好会なんだから関係ないじゃん」

「カツコつけちゃって…」

「ハハツばれた？んじゃカマさん助けてくれてどーもでした」

誰もいない静かな廊下を一人で歩く。

“風変わりしてる”ねえ…。

こんな平和な学校でそんな変なことが起こるもんかね。

七不思議があるわけでもあるまいし。

頭の後ろで手を組んで角を曲がった。

ドンってくるかなって思ったけど、平方は来なかった。

…うーん。変だ。何かが変だ。

違和感を胸に抱えたまま部室に着いた。

ドアを開けると一斉に3人の顔がこっちに向いた。

「…」由輝「…」

その顔を見て思った。

これはちよつとどころじゃないかもなって。

「遅れてわりい。しんみりしちやってるけど、どんな依頼？」

「これ…」

茜に手渡された手紙は黒い便せん。文字は血のような赤色。

一通り目を通す。

なんだ…手紙が派手なだけでけっこう普通じゃん。

「…やるか」

「当たり前」

手紙を机に置くと、依頼に取りかかった。

違和感だらけ（後書き）

次は緋紹さん！

1 (前書き)

緋紹です！

俺は今、校舎裏を見張っている。

非常階段の手すりの陰に隠れてオペラグラスを片手に膝をついていた。

「こちらA地点、特に異常なし!!」

『了解!!こちらB地点、異常ありません!!』

「了解!!」

B地点　朝弥からの応答にトランシーバー：いやいや携帯を閉じる。

楽しい!これ!

いや、これは決して遊んでいるわけではない。

汗を拭って体勢を変える。

そもそも依頼内容がおかしいのだ。

数日前　。

「ちよつと、これ見てよ!」

茜が微妙な顔をしながら入ってきた。

「何?」

カメラのレンズを拭いていた朝弥がマヌケな声を出す。

マンガを読んでいた俺はマンガを閉じてソファから立ち上がった。

「どうした?」

依頼箱から取ってきたのだろう、2枚の紙を持って、差し出した。

1つは黒い、しかも便箋入り、もう1つは普通のだった。

「どう思う?これ」

黒い方を開く。

“美しき生徒の黒い部分を表へ出そう、これが私の使命だ  
万事屋同好会諸君、私を止めてみる!!”

「……名前書いてないよな……」

「怪しいこと、この上ないよね？」

「まあなあ」

「見せる！」

朝弥が奪って見ている間にもう1つの方を見る。

“酷いいたずらをされました。犯人を見つけてほしいです。”

2年B組 上杉 春奈 ”

いたずら……。

「なんだこれ！」

「挑戦状……ってやつだろ」

「うーん……」

そこに由輝が帰ってきて、手紙を見せた。

「やるか」

「当たり前」

外へ出ようとドアに手を伸ばして 急にドアが開いた。

「うわっ」

「ちよつと聞いてよ！わけわかんない！！」

「さ、咲……ちよつと落ちついて……」

「落ちつけないわよ！！腹が立つったらない！！」

ジャージ姿で入ってきた平方の後に中元、吉野、小森ちゃんが入ってきた。

「何事？」

やや呆れ気味で由輝が聞く。

「それがね」

放課後、帰り道に校舎裏を通ろうとしたら上から黒い液体が落ちてきたというのだ。

小森ちゃんの上に。

平方がとっさに助け（突き飛ばし）たおかげで小森ちゃんにはかからなかったが、自分にはかかってしまったと。

よくよく見れば、小森ちゃんの制服にしぶきが飛んでいた。

「これも……机の上に……あつて……いたずらかなつて……思ってたから、その、あの……」

「放つといたわけだ」

「は、はい……」

渡された予告的なものを見る。

“あなたの黒い部分をさらします”

「すつごくわかりにくい表現だね」

茜がのぞきこんで言った。

「で？犯人を見つけてくれてること？」

「そうよ。こんなの許せない」

吉野が憤るように言った。

大きくて意思の強そうな目に怒りが宿っている。

「じゃあ2：2にわかれるか。オレと茜が飛鳥の方で」

「私も多分そいつにやられたわ」

突然入ってきた声に全員動きを止める。

「え？」

戸の方を見ると、ボブくらい長さの髪が内側にカールした、おつそろしいほど足の長い女生徒が立っていた。

「私、上杉春奈。飛鳥ちゃんも黒いのかけられたんでしょっ？」

「は、はい。春奈さん」

「知り合い？」

朝弥が尋ねると、小さく頷いた。

「モデルの……先パイです……」



1 (後書き)

次は夕さん！

## 調査開始（前書き）

夕です。

ノートからの写しが終わりましたので、  
ここからは更新が不安定になるかもです。

改めて、西川 茜 の作者です。  
よろしく願います。

## 調査開始

上杉春奈、さん。

小森さんのモデルの先輩だという彼女は、確かに、とうなずけるほど美人さんだった。

「あー…」

静まりかえった部室の中で、みんなを代表して真実が上杉さんに話しかける。

「この依頼の、人…ですよね？」

「ええ。歩いていたら急に黒い液体が降ってきたの…。それが何回も続いたから、怖くなって…」

また、黒い液体。

黒。黒かあ…。

そう言えば、あの挑戦状も真っ黒だったよね。

依頼中だといっても、女子だらけのあの空間にいることは僕にとってキツイことこの上ないから、そーっとその場を離れてもう一度挑戦状らしき手紙を手にとった。

「“美しき生徒の黒い部分を…”か…」

この“美しき生徒”っていうのは、小森さんや上杉さんみたいなモデルをしてる生徒ってことでいいのかな。

そんな生徒、あんまりいないと思うけど…。

「飛鳥、モデルの先パイって他にもいるの？」

「いいタイミングで吉野さんが質問する。」

「え？えっと…この学校、には…あと一人…横峰先パイが、います…。なんでですか…？」

「うん。上杉先輩と飛鳥が狙われたわけだから、他にモデルがいるのなら、その人も狙われるんじゃないかと思って」

…確かに。

犯人がどんな目的でこんなことをしてるのかは分からないけど、こ

れで終わってくれるとは思えない。

「万事屋同好会、出勤だあっ！」

朝弥の号令とともに、僕達は部室を駆け出した。

「ここで、黒いのが…降ってきたんです…」

僕は朝弥とともに、小森さんに連れられ校舎裏に来ていた。

さつき部室を出た時にざつとグループ分けをして、僕と朝弥、真実と由輝、女子はまだ誰が狙われるか分からないから、とりあえずはそれぞれふたりずつ僕達についてもらうことにした。

上杉さんとは用事があると言われついさつき別れたばかり。

「いつもこんなところ通って帰ってるの？」

「近いからいいの」

もう一人の女子、吉野さんが言う。

いくら近くてもさ…荒れ放題だよ？ここ。

「まだ、黒い水が残ってるな」

朝弥が濡れた地面の写真を撮った。

「飛鳥、上から降ってきたんだよな？」

「は、はい…。窓が開く音とかも、なくて…急に…」

そうになると、可能性はひとつしかない。

みんな一斉に上を見上げた。

そう、屋上だ。

「…行ってみようか」

「おう。その前に真実と由輝に連絡つと…。…こちらB地点！異常ありません！…ん、これから屋上行くところ！…なんで？って…」

電話が思ったより長く続きそうだから、僕は黒いものの観察をすることにした。

…多分、これは、墨汁。習字のときの。

犯人は書道部？でも、書道部に借りたっていう可能性もあるし。

「うーん……」

「そう簡単にはいかないか……」

いつの間にか、吉野さんが隣に来ていた。

「やっぱり屋上まで行って見ないと駄目だろうね」

「そうみたいね」

朝弥も電話が終わったようだし。

その場を離れようとした時、金属が軋むような音が聞こえたような気がした。

「Aチームも屋上に行って見るってさ。………んん？」

朝弥が目を細める。

「どうしたの？」

その視線を追おうとぐるりと振り返ったとき。

「茜！吉野！避ける！！」

「えっ？」

僕と吉野さんめがけて、黒い液体が落ちてきた。

調査開始（後書き）

推理ものっぽくて楽しいです。

黒いのかげられるの誰にしよう？と迷った結果、茜と吉野さん。

一番展開がおもしろくなりそうだった。

次は秋雨さん！よろしく！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5698s/>

---

白紙に綴る夢

2011年12月18日00時51分発行